親馬鹿花妖怪

にんぽっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親馬鹿花妖怪

【Ｎコード】
Ｎ２１２２Ｖ

【作者名】
にんぽっぽ

【あらすじ】
最凶と恐れられるあの『風見幽香』に隠し子がいた！？
親馬鹿妖怪と、瓜二つの娘が繰り広げる物語。
基本ユルいですが、たまにシリアスになります。
肩の力を抜いて、お楽しみいただけると幸いです。

オリキャラは娘だけです。
性格の歪んだ、あるいは捻じ曲がったキャラが多数出てきます。ご注意下さい。

ａｒｃａｄｉａ様にて連載し、完結した処女作リメイク改訂版となります。
オリキャラの性格、物語展開がかなり変わります。予めご了承ください。

第一話　向日葵の娘

どんよりとした曇り空。
今にも雨が降り出してきそうな、陰鬱な天気。
チェック柄の服に身を包んだ少女は、とある家の前に立ち尽くしていた。
どうしてここにいるのかは良く分からない。
だが、ここに来なければいけないという気がしたのだ。
まるで導かれるかのように、ここまで来ることが出来た。
自分はこの家の場所など知る由もないのに。

そもそも自分が何者なのかも良く分かっていない。
いつ、どこで、誰が、何のために自分を生み出したのか。
とんと見当もつかない。
分かっているのは自分の名前だけ。
勿論、誰が名づけてくれたのかも良く分からない。

「……」

何回かノックをしてみる。
暫く待ったが返事はない。
留守なのかもしれない。

念のためにもう一度ノックをする。
やはり返事はない。

どうしたものだろうか。少女は考え込む。

腕を組んで、軽く首を捻る。
引き返そうか。少女は来た道を引き返そうとする。
だが、戻る場所などない。
待っている者もいない。少女にはそんな者は存在しないのだから。

何度かドアまでの道を往来する。
数十秒悩んだ後、一度だけ頷いて、ノブに躊躇いがちに手をかけた。

鍵は掛かってはいなかった。

「今年も見事に咲いたわ。本当に素敵ね。
花達もとても嬉しそうに咲いているもの」

一面に広がる黄色の大地。
空には燦々と照りつける黄色い光。
青空と入道雲。
今年も見事に咲き誇る、黄金色の花々を見渡した後、私は満足げに目を細める。
能力を使えば咲かせるぐらい訳は無いが、やはり必要以上に手を掛けるのは美しくない。
自然が一番など安っぽい台詞ではあるが、私はそう思うのだ。
豊かな土、太陽の光、それに水。これさえあれば十分である。

吹き抜ける風を受けた後、私は髪を掻き上げる。
そして、隣にに立つ『可憐な小さな花』の肩にそっと手を乗せる。

先程花の育成には、土、光、水の3種類。これさえあれば十分だと私は言ったかもしれない。
それは分かっていても手をかけまくりたい、むしろ寝食忘れて世話をしたい花が私にはあるのだ。
目に入れても痛くない、むしろ入れたいくらいの愛らしさ。

「ねぇ、そう思わない？　貴方が心を込めて、丁寧にお世話をしてくれたお陰よ」

「はい母様。本当に綺麗です」

「もっと誇りなさい。貴方の成し遂げた立派な成果よ。

幻想郷に喧伝しても構わない程の見事な出来栄え。三ツ星確定よ」

「いえ、まだ十分ではありません。私が育てたのはほんの一握り。後は母様が――」

その言葉を遮って、私は可愛らしい頭にそっと手を置く。

「全く。謙遜なんて必要ないのに。

私達は家族なんだから。もっと子供らしく振舞いなさい」

私は努めて笑顔で話しかける。

そして、いそいそと弁当をバスケットから取り出し、シートの上に展開していく。

一段と気合を入れて作ってしまった渾身のランチ。驚きの重箱仕様である。

玉子焼き、ハンバーグ、タコさんウインナー、おいなりさん、うさぎ型のリンゴなどなど。

朝早く起きて調理した甲斐もあり、大満足の出来栄えだ。

シートに広がる作品を前に、驚きの顔を浮かべる。

私は心の中でガッツポーズをとる。

いつも冷静なこの娘が、驚きの感情を見せるのは非常に珍しい。

誰に似たのか、冷静沈着、超生真面目な性格に育ってしまった。

それはともかくとして。

私は祝いの言葉を口にする。

何しろ今日は私たちにとって特別な日なのだから。

そう、とっても大事な記念日なのだ。

「おめでとう美咲。今日は貴方の誕生日。
そして私と貴方が、親子になった日でもある」

「――はい、母様」

「誕生日おめでとう、美咲」

小さく頷く娘を見て、私は軽く抱きしめる。

「ありがとう母様、嬉しいです」

そう今日は我が愛しの娘、風見美咲の誕生日なのだ。
正確には少し違うのだが、細かいことはどうでも良い。

なんという素晴らしい日なのだろうか。幻想郷の記念日として大々的にお祝いしても良いぐらいだ。
外界では偉い人の誕生日が、休日になるという制度があるらしい。
こちらにも早速導入するように、妖怪の賢者達に申し入れてみよう。

『風見幽香の娘　美咲の素晴らしい誕生日』

是非カレンダーに載せたいものだ。
というより作ってしまおう。そう決めた。
作ると心の中で思ったなら、行動を起こさなければならない。。

カレンダー云々はここまでにするとして。
私が用意した、誕生日プレゼントの一つ目はこの景色だ。
一面に広がる色とりどりの華麗な絨毯。
美咲が手掛けた向日葵畑も勿論ある。それを取り囲むように、私が花々を添えてみた。

美咲の表情をを見た限りでは、かなり喜んでくれているようだ。
何ヶ月も構想を練った甲斐があったというものだ。

「後でゆっくり見てまわるとしましょう。
花達もきっと喜ぶわ。貴方が来ると、とっても嬉しそうにするのよ」

「はい、母様」

後で花冠を作ってあげるとしよう。
ちなみに他のプレゼントも一杯用意してある。
某人形遣いにお願いして強引に作らせた、とっても可愛らしいお人形。
某ガラクタ屋からパクってきた洒落た万華鏡。
その他にも沢山沢山用意してある。

話が多少脱線してしまったが美咲は正真正銘、誰がなんと言おうが私の娘である。
細かいことは割愛するが、種族としては妖怪となるだろうか。
本当の所は、私も分からない。だがそんなことはどうでも良い。

容姿は私をそのまま小さくしたような愛らしさ。歳は花も恥らう8歳ということにした。
実年齢は分からないが、それもどうでも良い話ではないか。
ああ実に可愛いらしい。もうダメ妖怪と言われても構わない。

カリスマ溢れる超クールな母親を目指していた私は、超スパルタ教育を施してきたつもりだ。

一人でお花のお世話をさせたり、一人でお風呂に入らせたり、一人でトイレに行かせたり。
涙をぐっと堪えて厳しいムチを振るってきた。当然陰から見張ってはいたが。
その甲斐あって何処に出しても恥ずかしくない、可憐なお嬢様として立派に育ってくれた。
ちょっと無表情で、感情を外に出すのが苦手なのが珠に瑕だが、全然問題ない。
むしろ悪い虫が付かない分好ましいぐらいである。

美咲は私に似て『穏やか』で『優しい』心を持っているので、花畑で妖精たちといつの間にか仲良く遊ぶようになっていた。
まぁ遊ぶというより、美咲に妖精たちが纏わりついているというのが正しいのだが。

ちなみに私は妖精と遊んだりしたことはない。なんでなのかは未だに分からない。
一応母親として、友達には挨拶するべきだろうと判断した私。
挨拶をしようと笑顔で近づいたら、妖精たちが泣き叫びながら散り散りに去っていったこともあった。
――こんな感じで。

「母様。その笑顔では誰でも逃げ出すと思います」

「そ、そうかしら？」

「口は笑っているんですが、眼が笑っていません。
むしろ殺気が溢れ出しています。
もう少し笑顔の練習をした方が――」

「別に良いのよ。私は貴方さえいてくれれば良いのだから。
だ、だから私には笑顔の練習なんて必要ないのよ」

などといった事があり、少し凹んだりしたこともあったが、健やかに平和に過ごしてきたのだ。
誰にも関わらせず、私達だけの幸せな時間。絶対に誰にも邪魔させない。
この幸せがいつまでも、いつまでも続けば良い。私はそう考えていた。

お昼を食べ終わり、特に目的もなくまったりとしていた私達。
その空気を破り、突如として娘からお願い事をされてしまう。
いつかそういうこともあるだろうと覚悟はしていたが、まさか今日だとは。

「そろそろ私もこの幻想郷を見て回りたい。
飛ぶ練習も一杯してきました。お願いです母様」

「……と、突然ね。一体どうしたというの？」

「母様みたいに弾幕ごっこもやってみたい。
もっと私も強くなりたい。母様みたいに」

上目遣いにお願いされてしまう。
この娘が私にお願いするというのは、これが始めてかもしれない。

「だ、弾幕ごっこも？　そ、それはどうかしら。
それに貴方が強くなる必要なんて、どこにも」

「駄目ですか？」

「そ、そうね。少し考えるから、ちょっとだけ待って頂戴。色々とシミュレーションしてみないと」

アルバムに残しておきたいシーンである。
今日は美咲が私に初めておねだりをした日になった。
心の記念日に追加だ。

『幽香心のアルバム』に今の光景を残しつつ、私は先程の件について考える。
黄金色の脳細胞が動き出す。最大全速のフル稼働だ。

問題点はいくつかあるが、１つ目は私に子供がいることを誰にも教えていないのだ。
花畑の妖精たちは３日立てば細かい事を忘れてしまうようで、楽しく遊んだという記憶しかないらしい。
よって、誰かに漏れているということは考えらにくい。
人間たちは人間友好度『最悪』の妖怪のテリトリーになど近づいて来ないし。
妖怪たちは私の発する殺気を感じて、あまり近づいてこない。
意図的に近づけないように、私が定期的に行っている『虫除け』みたいな物である。

そんな私が、娘を連れて颯爽と登場し『私の娘です。今後とも宜しく』などと言ったら、
『どこで攫って来たんだこの凶悪妖怪！』などと濡れ衣を着せられ

かねない。
そんな展開になったら、思わず相手の顔を何回も何回も撫でてしまいそうになるだろう。
首の骨が思いっきりへし折れるくらいに。
厄介そうなのは隙間、天狗、貧乏巫女、人里の教師といったところか。
弾幕ごっこではなくリアルバトルに突入してしまう可能性が非常に高い。
いわゆるルール無用のデスマッチと言う奴だ。
勝つのは勿論私である。

2つ目は何にでも首を突っ込んでる『白黒魔法使い』と出会う可能性が非常に高いことだ。
万が一にもあの馬鹿に美咲が懐いてしまい、『だぜだぜ』言うようになったら恐ろしい。
本当に恐ろしい。想像しただけで鳥肌が立つ。

『ようおふくろ！　今日も絶好調だったぜ』
とマスタースパークを意味もなくそこら中に撃ちまくり、

『落ち込んだりもしたけれど、ワタシは元気だぜ！』
などと叫んで箒やらデッキブラシに乗って、火車の猫と共に幻想郷を駆け回るのだ。

私は立ち眩みを起こして、態勢を崩してしまう。
凄まじい悪夢を見てしまった。
慌てて私の身体を支える我が娘。本当に優しい子だ。

「母様？」

「だ、大丈夫よ。ちょっとだけ眩暈が。
し、心配ないわ。ごめんなさいね」
思わず卒倒しそうになってしまった。
美咲が不良になってしまった！　と意味もなく絶叫するところだった。

考えれば考えるほど良くないことばかり思いついてしまう。
正直デメリットばかりだが私は、娘の願いを聞き届ける以外に道はない。
なぜならば。

「……分かった。貴方のお願い聞いてあげる。
但し、悪い魔法使いには近づいちゃダメよ。
特に白黒の邪悪な魔法使いにはね。約束よ」

「ありがとうございます、母様」

特に笑顔になることもなく、淡々と礼を述べる美咲。
だが私には分かる。この顔は機嫌が良い時の顔だ。
ほんの些細な違いだが、私には見抜くことが出来るのだ。
だって母親だから。

「気はとーっても進まないけど、弾幕ごっこの練習も少しだけやりましょう。
ほんの少しだけね。ちょっと嗜む程度にね。」

「ありがとう母様。一生懸命練習します。

――そして、いつの日か、必ず母様を越えて見せます」

不穏な言葉を聴いたような気がしたが、敢えて聞き流す。
私とこの娘が戦うなんて事は絶対にないのだから。

私は美咲の身体をおもむろに抱き寄せる。
為すがままにされる娘。

「さぁ、食べ終わったら散歩の続きをしましょう。
沢山の思い出を作りましょうね」

「はい、母様」

どこか照れくさそうに目を背ける美咲。
私は満面の笑みで頭を軽く撫で続ける。

この娘が喜ぶ姿を見れるのならば、私の事など大した問題ではない。
美咲に降りかかる火の粉は、全て私が打ち払えば良いのだから。
私は心のアルバムに、新しく増えた一枚を納める。
今度は本当のアルバムを作ろうかと、今更ながら思案するのだった。

・風見幽香
花を操る程度の能力

第一話　向日葵の娘（後書き）

最初に書いた小説を、気晴らしに改訂してみることにしました。
もうひとつの作品が、少し行き詰ってしまったこともあり、
基礎に立ち返る事が目的でもあります。

文章はテンポ重視で、軽くいきたいと思います。
こちらはひっそりこっそりと続けていきます。

第二話　博麗の巫女

紅い液体が口から流れ落ちる。
その瑞々しい肉体に欲望の儘に齧り付く。
何度も何度も、原型が留まらないほどに牙を突き立てる。
滴り落ちる液体が、もう取り返しが付かない事を表していた。
大事に大事に育ててきた結果がこの有様だ。
私の大事な果実は、こうして私に蹂躙される為だけに生まれてきたのだ。
だから、こうなることは間違いじゃない。運命だったのだから。
なぜか、私は空虚なモノを感じて空を見上げた。

「今日も私のポエムは冴え渡るわ。動き出したペンが止まらないもの。
小説家にでもなろうかしらね」

収穫したばかりのトマトを齧りながら、ペンをぐるぐる回す。
ペン回しもそうだが、私の趣味の一つが日記を付けることである。
日常生活にアクセントをつけたクールな文章を綴るのが、私の密かな趣味なのだ。
ただそのままに、『娘が収穫した赤く熟れたトマトをおいしく食べました。まる』
ではなんとも味気ないではないか。分かりやすいけれど。

ちなみに絵日記も試してみたが、なんというか前衛的な抽象画になってしまうので断念した。
娘と私を書いたつもりが、おぞましい『よくわからないなにか』を描き上げてしまったのだ。
そのノートからは何やら妖力を感じたので、念のために博麗神社の賽銭箱に投げ入れておいた。
困ったときの巫女頼みだ。普段だらけているのだからお払いぐらいはするべきだろう。
賽銭箱からはキシャーという雄叫びが聞こえたが、私は気にしない事にした。

「ふーそろそろ寝るとしましょう。明日はいろいろと大変でしょうからね。」

日課を終え軽く伸びをする。
娘の眠るベッドに入り、ゆっくりと目を閉じる。
いよいよ明日は、娘を連れて初めてのお出掛けだ。
もしかしたら一騒動あるかもしれないかと思うと
興奮してなかなか寝付けなかった。

「おはようございます。母様」

「……おはよう美咲。死にたくなるような清々しい朝ね」

「とりあえず、顔を洗った方が良いと思います」

「そうね。そうするわ」

……結局全然眠れなかった。
ふらーとゾンビのように立ち上がり、洗面所で身だしなみを整える。
鏡を見たときは、あまりの目つきの悪さに自分でも驚いた。
きっと娘も驚いたことだろう。まるで凶悪妖怪である。
視線だけで人が殺せそうな程の。

よろめく身体で台所に向かい、朝食の準備をする。
今日の朝食はトーストと、野菜サラダ。それにスープだ。
軽くいくことを決め、ささっと調理を行う。

出来立ての朝食を食べながら、注意することを再確認する。
外は敵が一杯だから、守らなければならないことが沢山あるのだ。

「昨日も言ったけれど、今日出かけるのは博麗神社よ。
そこには幻想郷の異変解決を担当する巫女がいるわ。
……万が一戦闘になったら、貴方はすぐに逃げなさい。いいわね？」

あくびを堪えながら凛とした顔を作る。
カリスマを維持するのも大変なのだ。

「博麗の巫女は強いんですか？」

「口よりも先に手が出るタイプよ。異変解決に定評のある、幻想郷
において最強の人間でしょうね。
妖怪退治の専門家。関わりたくない人間の一位ね」

貧乏で賽銭が少ないことにも定評のある博麗霊夢でもある。
ひもじい顔を眺めると、とても良い気分なのだがそれはここでは言えない。
私のイメージが崩れてしまう。

「母様とではどちらが強いのですか？」

難しい質問をしてくる娘。
巫女は幻想郷の要である。それを殺すような真似は出来ない。
何より、今のこの世界ではそのような事は自殺行為である。
よって、手加減に手加減を重ねなければならない『弾幕ごっこ』ぐらいでしか勝負が出来ない。

「そうねぇ。互角ぐらいじゃないかしら。
本気を出したら、人間如きが私に叶うわけがない。
でも今の流行は弾幕ごっこだからね。霊夢はスペルカードでは凄腕よ」

勿論、博麗の巫女はそんなに甘い存在じゃない。
本気の殺し合いとなったら、どう転ぶかは分からない。
だが、娘の前なので多少の誇張は許されるだろう。

「そうなんですか。お会いするのが楽しみです」

「余り期待すると、その落差にがっかりするわよ。
貴方の考えている巫女像の、半分で丁度良いくらいね」

「分かりました」

今日は博麗神社なんか行かないで、湖あたりへのピクニックに変更しようか。
どうして貧乏巫女に、娘が大事に育てた野菜をプレゼントしなければならないのだ。
一応手土産として、畑で収穫したばかりの野菜を用意してあるのだが……。
私は必要ないと言ったのだが、気配りの出来る美咲がどうしてもと言うので、
仕方なく持って行くことにしたのである。

美咲は野菜を育てる能力があるらしく、少し教えただけですぐに覚えてしまった。
その上味も抜群で、私も思わず唸ってしまう出来だ。
これなら来るべき『至高』との対決にも勝てるというのに。
瑞々しい夏野菜達が泣いているわ……。
私が心中で葛藤を繰り広げている間に、テーブルの上は綺麗に片付けられていた。
流石は私の娘。片づけまで完璧だ。
私はあんまり食べてなかったような気もするけど、きっと気のせいだ。

「そろそろ出かけましょう母様。予定時間からかなり押しています」
「心配いらないわ。私が手を繋いで全力で飛ばせば問題ない。
もし良かったら抱っこして行きましょうか？」
「いえ、大丈夫です」

即座にお断りされてしまった。
もうそういうのが恥ずかしい年なのだろうか。
少し寂しい。

「そ、そう？　それなら良いけど。
じゃあ準備がよければ向かいましょう」

「はい、母様」

娘は妖力は十分にあるのだが、まだ上手くコントロールできていない。
いくら素質があっても、経験を積まなければ無意味である。
弾幕も不味いながらも、私の教えの甲斐もあり、多少は張ることが出来るようになった。
まぁ闘わせる気など全くないので、人間やら下級妖怪相手に自衛できる程度で構わない。
というか私が目を光らせている限り、そんな心配は一切必要がない。
虫一匹近づけないと、断言できるから。

・博麗神社

人里から離れた山奥に存在する、幻想郷と下界との境界に位置する

要ともいえる存在。
それがこの博麗神社。
私から言わせれば、寂れた、貧乏くさい、ただのほったて小屋という認識なのだが。

娘と手を繋いで境内に降り立つ。

「ここが博麗神社よ。貧乏くさい建物でがっかりしたでしょう？」

「いえ、なんだか厳かな空気を感じます。こう重圧感みたいなものが」

「それを感じ取るとは流石は我が娘ね。
貧乏くさいけど、そこそこに重要だから一応覚えておいてね」

「……」

ブラブラと辺りを見渡すが、巫女は見当たらない。
どうせいつものように惰眠を貪っているのだろう。
相変わらずのだらけ巫女だ。娘の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいところだ。

そうだ。
丁度良いので例のブツをもう一冊始末させてもらうことにしよう。
上達を目指して書いた絵日記2である。またちょっと妖力を感じるので困っていたところだ。
本はブルブルと震えながら、今にも具現化しそうな気配を漂わせている。

「じゃあお賽銭がわりにコレをいれておきましょう。

こういう時に大事なのは、気持ちだからね」
笑顔とともにソレを賽銭箱にいれようとしたその瞬間。

「ちょっと！　そんな呪われたもの賽銭箱にいれんじゃないわよ！
また参拝客が減るでしょうが！！」

馬鹿でかい声と共に腋巫女が現れた。
胸は慎ましいのに、声だけは大きい女だ。
そんな視線を感じ取ったのか、敵意を露にして私を睨みつけてくる霊夢。
まるで野犬のよう。どういった育ち方をしたのだろう。親の顔を見てみたいものだ。

「うるさいわね。そんなに怒鳴らなくても聞こえているわ」

「黙りなさい。というか、この前の呪い絵もアンタの仕業だったのね。
なに？　私への挑戦状かしら。受けて立つわよこの糞妖怪！」

札を取り出して、臨戦態勢に入る霊夢。
平和的に話していたのに、おかしな話である。

「違うわよ。ちょっと妖力を感じたからお払いしてもらおうと思って。
お払いも貴方の立派な仕事でしょう？」

「ふざけんな！　ちょっとどころか忌しすぎて眩暈がしそうだったわ。

具現化しようとして、調伏するのにどれだけ手間取ったと思ってんのよ！」

青筋を立てて怒る巫女。友好的に会話していたのになぜか険悪なムードに。

このままではいけないわね。子供が見ている前ですもの。

まずは話を逸らしてみよう。

「そんなにいきり立っていてはお話もできないわ。お茶でも飲んで落ち着きましょう」

ささっと湯のみを差し出す。こんなこともあろうかと、さっき用意しておいたのだ。

いれ立ての美味しいお茶である。

「アンタ、それウチのお茶じゃないの！」

「細かいことは気にしないで。さぁグッといってグッと」

グイグイと湯飲みを押し付ける。

霊夢は嫌そうな顔をしながらも、やがては観念して受け取った。

作戦大成功である。

「ハァ……。もういいわよ。アンタと話してたらなんか疲れてきた。妖怪相手に一々怒ってたら、身体がもたないのを忘れてたわ。

それで何の用な訳？　賽銭入れる気はないようだけど」

湯飲みを両手に持ち、縁側に腰掛けてため息を付く巫女。

幸せが一匹逃げていった。

とりあえず私は娘を呼び寄せる。
無言、無表情で霊夢を見つめ、その様子を窺っている。
なるほど、まずはしっかりと観察から入る。素晴らしい。
いつかはこの外道巫女を上回り、幻想郷を支配するかもしれない。
そんな、白昼夢を見た今日この頃。

「ええ。実はこの娘に幻想郷案内をしていたのよ。まずはここからと思ってね。
一応はこの世界の要でしょう？」

私の言葉を聞き、怪訝な顔でこちらを見る巫女。
その視線は美咲へと集中している。
美咲も視線を逸らすことなく、霊夢の視線を受け止めている。
もし娘を泣かしたら、即座にストレートをぶち込むつもりである。

「……アンタと同じ服装だけど、その娘は一体なに？
まるでそのまま子供化したみたいな感じだけど。
妖力で生み出したアンタの分身とか？」

戯言を吐く馬鹿巫女。
なんということを言うのだろうか。
とんでもない女である。

「そんな訳ないでしょう。貴方の眼は正常なのかしら？
月の人間に診察してもらった方が良いわよ」

「生憎私の視力は鷹並なの。そんな心配は無用よ。
それで、そいつは誰なのよ。説明しなさい」

そいつ呼ばわりに、私はカチンと来るが我慢する。
ここで暴れては、全てが水の泡。

「さぁ美咲、ちゃんと挨拶をして。練習した通りにね。
こんな外道巫女でも、一応挨拶はしないと駄目よ」

「誰が外道巫女よ。変な事を教えるんじゃない！」

「本当にうるさいわね。さ、美咲」

肩に手を置いて促す。頑張れ頑張れと心の中で旗を振る。
声には出さない。あくまでも心の中で応援するのだ。

「はじめまして、博麗霊夢さん。
私は風見幽香の娘で、名前は風見美咲です。
今後とも宜しくお願いします」

「……え？」

淡々と教えたとおりに挨拶する美咲。
全く緊張していないようで、むしろ霊夢を圧倒している。
素晴らしい。

「グッド！！」

私は思わず叫んでしまう。
ワンダフル！　まさにパーペキ。超グッドである。
１００点満点の大花丸をつけてしまおう。赤筆先生も納得するわ。

「い、今娘って言った？　この凶悪妖怪に、こんな小さな娘？

冗談でしょう。そんなの倫理的に許されないわ」
信じられないと、目を丸くして大声を張り上げる霊夢。
「何よ。私に娘がいると、何か問題があるのかしら」
「……問題だらけでしょ。この凶悪妖怪が」
「喧嘩を売ってるのかしら、博麗霊夢。
言って良い事と悪いことが世の中にはあるのよ」
「それはこっちの台詞よ！」
敵意を籠めて睨みつける。
霊夢もそれを受けて睨み返してくる。
「……」
美咲はいつものように無表情に、それをただぼんやりと眺めている。
何を考えているかは読み取れない。

妙な緊張感に包まれる中、その無言のにらみ合いは、数分間の間続いた。
やがて霊夢の腹の音で、緊張感が崩れ、なし崩し的に神社の中へと案内されるのであった。
こういうガサツな女には絶対にさせないようにしようと、
私は固く決意するのだった。

・博麗霊夢

空を飛ぶ程度の能力

第二話　博麗の巫女（後書き）

元と比べて、娘のテンション←←←です。
風見幽香さんはいつも通りです。

第三話　白黒の魔法使い

チリンと鳴る風鈴の音が聞こえ、部屋に入ってくる一陣の風に夏の風情を感じる私。
爽快感に浸っていると、それを邪魔する耳障りな鳴き声。
ジージーやらカナカナやらミーンミーンといった大合唱が私のイライラを増幅させるのだ。
夏の風物詩とはいえ、イラつくものはイラつくのである。

例えば、目の前に座っているこの小娘のように。

「なぁ。そんなにイライラしてどうしたんだ？　珍しい客なんだからなんか話せよ。」

ニヤニヤと笑いながら軽口を叩いてくる金髪娘。
名前は霧雨魔理沙。人間ながら魔法使いだとか言っている、たわけ者である。

見ているだけで、なんだかこみ上げて来るものがある。
生意気そうな頬を抓りたくなる衝動をなんとか抑える。
別に我慢する必要などないのだが、あまり無様な姿をみせるわけにはいかない。
カリスママザーたるもの、常に威厳溢れる姿勢を保たねばならないのだ。

よって、軽く流すのが正解だ。

「別にイライラなんてしていないわ。私の事は放っておいて頂戴」

ちゃぶ台を人差し指でドンドンドンドンと連打しながら返事をする。
叩き壊すと後で霊夢がうるさそうなので、一応手加減はする。
ああ、早く戻ってこないかしら。
というか見に行ってみようか。イケナイ事態が起こっている可能性もある。
手遅れになってからでは遅いのだ。

立ち上がろうとしたところ、再び私を遮る呑気な声。

「それで結局、お前はなんでここにいるんだ。
さっきから全然答えてくれないじゃないか。
立ったり座ったり落ち着かないんだよ」

呆れたような表情で問いかけてくる白黒娘。
白黒というのは、服装が時代を間違えた魔女コスチュームからである。
白黒といえば、魔理沙。魔理沙といえば白黒。そういうものだ。

「……貴方はそこでお茶でも飲んでなさい」

「さっきからそうしてるぜ」

「あっそ」

さっきからこの繰り返しである。大体１０回くらいは繰り返しただろうか。
なぜこうなったかというと、話は３０分くらい前に遡らなければならない。

完璧すぎる挨拶の後、とりあえずと居間に通された私たちは
美味しくない湿気た煎餅と、そこそこ飲めるお茶でもてなされたのだ。
巫女はよっこらせと座布団に座り、机に肘をついて湿気た煎餅をバリバリと齧りつく。
もう少し上品な食べ方が出来ないものだろうか。
仮にも巫女なのに。

「・・・・・・で、この子がアンタの娘っていうのは本当なわけ？」

猜疑心に満ち満ちた視線を向けてくる霊夢。
とりあえず疑ってかかるタイプなのだ。この女は。
その癖、腕力と霊力は人間離れしたものがあるのだから、迷惑この上ない。
生まれる時代と場所を間違えたとしか思えない。
是非世紀末辺りにでも行って、変な髪形相手に大暴れしていて欲しい。

「さっきしっかりと挨拶してたでしょう？
本当も何も、それ以外に何があるっていうのかしら」

私は胸を張って言い切る。豊かな胸をわざと強調するように。
殺意の篭った視線を感じたが、即座に消える。
胸の大きさにコンプレックスなど感じない、などと平然としている奴ほどその逆なのだ。

口元を歪めて霊夢に視線を送る。
眉が危険な角度に曲がってきた。面白い女だ。

「……何よ。喧嘩売ってるの？」

「フフッ、別に」

胸なんかで女の価値は決まらないわよ博麗霊夢。
……これは持ちたるものだけが言える台詞ね。

「話を元に戻すけど。やっぱり信じられないわ。
里から似た娘を攫ってきたと言われたほうが、余程現実味があるわ」

里から攫ったとして、知らない子供を育てて何が嬉しいのか是非教えてもらいたい。
今の私は自分のプリンセスをメークするのに、忙しくて仕方がないというのに。

ところで育ての親と結ばれるというのは、道徳的にどうなのだろう。
血が繋がっていなくても、やはり色々とまずいと思う。
八雲の変態は、それが良いのですなどと言っていたので、
とりあえず全力でぶん殴っておいた。手加減なしのガゼルアッパー。
暫くしたら正気に戻ったので良しとする。

それはともかく、

「そんな訳がないでしょう。
第一、そんな物騒な真似をしたら里の守護者やら妖怪の賢者が黙っていないわよ。

里では常に監視されているからね。誘拐など出来る訳がない」
私が里に行くと、常に自警団の屑どもが私の周りをマークするのだ。
気付かないフリをしてやってはいるが、そのうち躾をしないと図に乗るだろう。
人間とはそういうものだ。
「……じゃあ父親は誰なのよ。そもそも妖怪なの？半人半妖？
妖力を感じるから人間とは思わないけど」
「父親はいないわ。後は秘密」
「いつからアンタのとこにいるのよ。流石にその歳まで隠して育てていたとは考えにくい
「フフ、教えてあげないわ」
「……最初から『あの姿』だったの？」
「教えてあげない。貴方が知る必要がないもの」
あの娘との最初の出会い。
それは私達だけの思い出。誰にも立ち入らせない。
思い出したくない事もあるけれど、あの日の事は絶対に忘れない。
「……つまりアンタの娘で、父親はいない。
名前は風見美咲ってこと以外は秘密なワケ？」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」

巫女は乱暴に立ち上がると、笑いながら怒るという器用なことをしながら親指を外に向ける。

「ちょっと表にでなさい。やっぱりちゃんとお話しないとダメなようね。
主にその不愉快な身体に」

やっぱりイライラしてたようだ。
貧相な身体だからって逆恨みはいけない。
そんなことをしても、体型は改善されないのだから。

「そんなに怒ってはシワが増えるわよ。さぁ、このお茶でも飲んで落ち着いて」

私はササっと湯飲みを差し出す。
中身は冷めているが、特に問題ない。

「だから私のお茶だって言ってるでしょうが！！」

私は横に大人しく座っている美咲に目で合図を送る。
仕方ないのでアレで釣るしかない。
霊夢に最も効果があるのは、賽銭とこれだ。

「宜しければ、召し上がってください」

「こ、これは？」

「私が育てた夏野菜です。収穫したばかりです」

おずおずと小さな手で、野菜が満杯に詰まった籠を差し出す。

その仕草は、どこかの令嬢のようで、何とも愛らしい。
抱きしめたくなる欲求を、ギリギリで堪える。
気分を変える為に、視線を籠へと移しその中身を確認してみる。
籠に詰まっているのは、瑞々しい夏野菜。
キュウリやらトマトやらナスやらピーマンだ。
涎をこぼしそうになっている博麗霊夢。
さらに畳み掛けるように、もう一つの土産を美咲が差し出す。

「これもどうぞ」

夏の代名詞ともいえる大きな萃香、いや西瓜。
手刀で叩き割りたくなる素晴らしい形をしている。
西瓜割りは夏には欠かすことが出来ない、大事な行事である。
家に帰ったらさっそく冷やしておいた萃香を叩き割ることにしよう。
中身が飛び散るくらいの勢いで。

餓鬼の化身、博麗霊夢は両手で籠を受け取り、西瓜を足で確保する。
まるで蹴球でもはじめそうなポーズである。
はしたないことこの上ない。娘の教育に悪すぎる女だ。
反面教師として欲しい。

「……最初からそういう態度なら、こんな面倒なことにならないのに。
こういうものは早く渡しなさいよね、全く」

零れる笑みを全く隠せていない。

食費が浮いたなどと、巫女にあるまじき事を考えているのだろう。
私は娘に教育することにする。
「美咲よく見ておきなさい。物で釣るというのはこういうことを言うのよ。
魚釣りのことじゃないのよ。理解できたでしょう？
そして釣られた人間の顔はコレよ。実に浅ましい姿でしょう。
一つ、勉強になったわね」
百聞は一見に如かずと言うけれど本当だ。
良い課外授業になった。
「はい母様。頭ではなく、この目でしっかりと理解できました。
博麗の巫女は、意地汚くて、浅ましいということも良く分かりました」
「――その通りよ。流石は私の娘。
一教えるだけで、百を理解できるのね。
母として誇らしいわ」
「はい、母様」
親指を立ててよく出来ましたと褒めてあげる。
娘も親指を立てて私に応える。
褒めて育てるのが風見流よ。
「……・アンタらやっぱり親子だわ。
その腹立たしい性格がそっくりだもの」

何故か大きな溜息をついて座り込む霊夢。
西瓜は横へと転がっていってしまった。
転石苔を生ぜず。特に意味はない。

――そんなこんなでだらだらと雑談していた私達。
主に私が霊夢をからかっていただけであるが。

突如として、美咲が私に対して声を掛けてくる。

「母様。少し博麗の巫女と話したいことがあるのですが」

「――何よ。厄介なのはお断りよ。面倒くさいのは大嫌いだから」

「別の部屋で話しても良いですか？　ここでは少し」

何故か私から視線を逸らそうとする我が娘。
ど、どういうことなの。理解できない。
まだ邪険にされるような年じゃないのに。
おかしいわ。ありえない。

「ね、ねぇ。ちょ、ちょっと――」

「……仕方ないわね。まぁ良いか。
野菜ももらっちゃったし、あれなら当分飢えなくてすむしね。
聞くだけならタダだから、別に構わないわよ。

ちょっと幽香、もうすぐ魔理沙が来ると思うからお茶出しといて頂戴」

「ちょ、ちょっと待ちなさい。詳しく事情を――」

「では母様、暫くの間失礼しますね」

立ち上がって、スタスタと奥の部屋に去っていく巫女様と娘様。

……あれ？　私置いてけぼり？

そして誰もいなくなった。私以外。

犯人は霊夢。Ｙの悲劇とでもいうのか。

意味が分からない。

――そして冒頭へ戻るのだ。

ようやく話が終わったらしく、二人は連れ立って居間へと戻ってき

た。
魔理沙との馬鹿らしいやりとりもようやく終わりという訳だ。
本当に体力と精神力を消耗させられた。
そんな私の気も知らず、相変わらずの間抜け面な白黒。
そんな魔理沙が二人に挨拶しようとして、手を上げたまま固まる。
時間が止まったかのように、笑顔を張り付かせたまま。
「よう霊夢、邪魔してるぜ！……って、リ、リトル幽香！？」
「――うるさいわね。いきなり声が大きいわよ」
「そりゃ声も大きくなるぜ！　どういうことだこれは。
私にも一から百まで全部説明してくれよ。何か面白そうだし！」
「やかましい」
「仲間はずれは良くないぜ！　ずるいぞ霊夢、この外道巫女！」
あちゃーと頭を抱える霊夢。
興味深々といった感じで、心から嬉しそうに私と美咲へと視線を往復させる魔理沙。
非常にまずい事態だ。ロックオン完了といった様子である。
一番見られたくない馬鹿に見つかってしまった。
とりあえず、さっさとこの場を去るのが正解と判断する。
馬鹿だから、３日ぐらい立てばきっと全て忘れるだろう。
ちなみにチルノとミスティアは３歩で忘れる天才だ。
馬鹿と天才は紙一重。実に良い言葉だ。
「それじゃあそろそろお暇しましょうか。

騒がしい蝉女がいるからね。ミンミン煩くて敵わないわ」

「誰が蝉女だ！！　ていうか、私にも詳しく説明を――」

「その必要はないわ。もうこの娘が貴方に会うことはないのだから。金輪際、この娘には関わらないで頂戴。それでは、御機嫌よう」

「――お、おい！」

まだ何か喚いている魔理沙。

それを無視して、私たちはささっと博麗神社を後にした。

しかし白黒不良娘に美咲の顔を見られてしまったのは失敗だった。あいつは好奇心の塊だから、いずれ『必ず』ちょっかいを出しに来るだろう。

更に目障りなのが、ゴシップ記事ばかり書いている天狗女だ。神社にいる頃から気配がしていたので、今頃トンデモ記事を嬉々として作成しているはずだ。

見出しは『花の妖怪に隠し子発覚！？　博麗神社での謎の密会を激写！！』

あたりだろう。見つけしだい全て焼却して、塵にしなければ。ついでに不埒な悪行三昧を徹底的に裁いてやるとしよう。必ずだ。

だが、その前に確認することがある。

「――それで、あの巫女と何を話していたのかしら。

全部教えてくれるわよね？」

手を繋いで飛びながら、ニッコリと笑顔を作り娘の方を向く。
できるだけ優しくエレガントに聞き出さなければ。

もしくは取って返して、あの巫女に強引に吐かせるかだ。
流石に博麗霊夢を相手にするのは面倒くさいので、避けたいところである。
弾幕ごっこというルールの中であれば、あの巫女は最強だ。
手強い女だというのは、認めなければならない。
ルール無用の肉弾戦に持ち込めば、負ける気は全くしないが、美しくない。

「申し訳ありません母様。今は言えません」

「……どうしても？」

「はい」

「私がお願いしても？」

「……申し訳ありません」

「むむむ」

こうなってはテコでも動かないだろう。
この娘はとても強情で頑固なのだ。一体誰に似たのか。
だがこのように意地を張る姿も、心のアルバムに残しておきたい一品である。

アルバムで思い出したが、実は『使い捨てカメラ』とやらも裏ルートから手に入れてあるのだ。
１個では全然足りないと思ったので、うっかり箱買いしてしまった。
何故か震えている店主に、『お願い』したら格安で売ってくれた。
これも日頃の行いのおかげだろう。

一度こっそりと娘を撮ってみたのだが、勘が良いのかこちらを振り向いてしまう。
それではダメなのだ。やはり被写体は自然体でなければ。
仕方がないので取り合えず記念撮影をして、写真立てに入れて部屋に飾ってある。
笑顔ではなく、いつもの無表情なのが残念なところだ。
厳しく評価して９０点。
私の夢は、この娘が笑顔を浮かべた瞬間をゲットすることである。

ちなみに私を撮影してもらったら、とんでもないものが撮れてしまった。
写真がぐにゃーっと歪んでいるのだ。誰だか判別出来ないくらいに。
あのカメラだけ不良品だったのだろう。所謂、流れ物だから仕方がないけれども。
見てると何故か気分が悪くなるので、人里のとある場所に置いてきた。
きっと拾った人にちょっとしたサプライズをプレゼントできる筈だ。

「――そうわかったわ。これ以上は敢えて聞かないわ。
いつか、貴方が話してくれるのを楽しみにしているわね」

「はい、必ず。越えることが出来るよう、精一杯頑張ります」
「じゃあ今日はそろそろ家に帰りましょう。
もうお昼の時間だし、メディスンが遊びにくるかもしれないわよ」

何を精一杯頑張るかを聞くのは野暮というもの。
空気の読める女、風見幽香は動じないのだ。
しかし何を頑張るのだろうか。歌のレッスンやらダンスという可能性はないだろうか。
歌って踊れる妖怪を目指すのも悪くはない。
夜雀やら幽霊楽団とともに幻想郷デビュー。そして仲間との別れ、ソロ活動への道。
華々しく活躍する娘をみつめ、私はそっと嬉し涙を流すのだ。
そんな私に、優しくハンカチを差し出してくれる娘。
感動のシーンだ。

ぼーっとそんなことを考えていると、どうやら我が家に到着したようだ。
全然気付かなかった。

「到着しました、母様。私は冷やしておいた野菜を取ってきます」

「え、ええ。気をつけてね」

板についてきた飛び方で、小川の方に向かっていく。
あの調子ならば、そのうち自由自在に空を飛びまわれるだろう。
それに比べて私は、元気に飛び回るのが億劫であるのは否めない。

そんなことだからどっかの本に、『花の近くから動き回ることはない』などと書かれるのだ。

「やれやれ。どこかのお子様闇魔にも言われたけれど、少し長く生き過ぎたのかしらね。
こんなことを考えるのも年を取りすぎたせいかしら」

幸せが逃げていくような深い溜め息をつき、家のドアをゆっくりと開ける。

「――よぉ。遅かったじゃないか。待ちくたびれたぜ。
いくらなんでもゆっくり飛びすぎだぜ。思わず眠る所だった」

私は声を掛けてきた馬鹿に満面の笑顔を浮かべた後、そのまま無言でドアを閉める。
振り返り空を見上げると、そこには雲ひとつない快晴の青空が広がっていた。
あまりの清々しさに、もう一度、今度は軽く溜息をつく。
また幸せが逃げていっただろうか。

願わくば、私から逃げた『幸せ』が娘に辿りつくようにと、心の中で祈ってみた。
あの娘は、誰よりも幸せにならなければならない。

――私の醜く歪んだエゴの犠牲者。彼女には幸せになる権利がある。

・霧雨魔理沙

魔法を使う程度の能力

・夏野菜とは
野菜の中での特に夏期に収穫されるものをいい、
キュウリ、ナス、トマト、ピーマン、オクラ、
トウモロコシ、ニラ、カボチャ、ズッキーニなどが代表的である。
ｗｉｋｉ先生より

第三話　白黒の魔法使い（後書き）

基本コメディ、ギャグ形。
所々に入るシリアス。
そういうのが好きです。

第四話　塔の上の死闘

・八雲紫と博麗霊夢の会話

「それで、あの娘はどうだったかしら？　親に似ず賢そうな子だったでしょう。
あの無表情なのがまた良いのよね。フフッ」
八雲紫が胡散臭い笑みを浮かべて、霊夢に問いかける。

「……アンタまた覗いてたわけ。まぁ姿はそっくりだけど。
性格は正直良く分からない。なんだか掴みどころがないのよね」

霊夢は腕を組んで考える。無表情、無感情。
何を考えているのか良く分からない。
霊夢への『頼みごと』も唐突だった。
何故博麗の巫女にそんなことを依頼してくるのかも、理解が出来ない。
自分の親に頼めば良いものを。
嬉々として教えてくれるだろうに。

ちなみに霊夢はその『頼みごと』を腐れ縁に丸投げした。
案の定興味深そうな顔をして、その頼みを引き受けた。
性格はアレではあるが、腕は確かだからまぁ問題はないだろう。
霊夢はそう判断し、面倒事を押し付けた。

「それはおいおい分かるでしょう。また楽しみが一つ増えてしまったわ。
これからが本当に楽しみ」

「……厄介ごとにならないと良いけど」

「それは大丈夫よ。教育熱心な母親がついているから」

「ただの馬鹿親じゃない。あれじゃ箱入りにしかならないわよ」

霊夢は溜息をつきながらお茶を飲む。

「それにしても、風見幽香が親馬鹿妖怪になるとはね。
年月は妖怪をも変えるのかしら」

「年寄り臭い台詞ね」

「――それだけ長く生きてきたということよ。私も、あの子もね」

・文々。新聞　号外

『花の妖怪に隠し子発覚！？　博麗神社での謎の密会を激写！！』

突然ではあるが1面に掲載した写真を見ていただきたい。
幻想郷でも指折りの実力者と評される『花畑の妖怪』風見幽香氏と、
容姿をそのまま小さくしたような女の子の2ショットである。
このスクープ写真は、たまたま博麗神社付近を飛んでいた記者が撮

影に成功した物だ。
本人に突撃取材を試みたところ、

「取材費は貴方の命で構わないわよね？　勿論先払いよ」
などと恐ろしい台詞が返ってきた為、這々の体で逃げ出してしまった。
真実を追究する新聞記者としては、全くもってお恥ずかしい限りである。

この件について聞き込みを行ったところ、
『長く生きた妖怪は、口から卵を吐いて自分の分身を作る』
『擬態が得意な妖怪を手下にしたようだ。本体はアメーバ形状のはずだ』
『魔法の森の人形遣いに作らせた精巧な人形だろう。能力により操作しているみたいだ』
などという話を聞くことが出来た。

もし貴方が真実を追い求めるのであれば、本人に尋ねてみるのも良いかもしれない。
但し、何があっても本紙では責任を取ることは一切ないので悪しからず。
（射命丸　文）

可愛らしい花柄のカップを手に取り、その馨しい香りをじっくりと堪能する。
やはりコーヒーはブラックに限る。上質を知る女は一味も二味も違うのだ。
職人による焙煎、挽き、その淹れ方。全ての英知がこの小さな一杯に詰まっているのだ。
それを楽しむことができるこのひと時。実に贅沢だ。

ちなみに豆は人里のとある店で購入することが出来る。
器具もそこで買い揃えた。
お茶やら紅茶党が多い幻想郷では、貴重な店なのだ。

それはともかくとして、砂糖やミルクを入れるなど邪道。
馬鹿みたいに砂糖とミルクをぶっこんだら、それはコーヒーじゃない。
それではただのコーヒー牛乳だ。
豆のブレンド、焙煎の特色が全て吹き飛んでしまう。
子供じゃあるまいし、ミルクや砂糖など私はつかわないのだ。

「母様、お砂糖とミルクは使いますか？」

私の娘が気を利かせてくれる。
素晴らしい気配り精神。いつお嫁にだしても問題ないだろう。
勿論出さないが。
私と殺し合いをして、勝ったら認めてやっても良い。

「あらありがとう。気が利くわね」
ドバドバとコーヒーへと注ぎ込む。
もう何個入れても構わないだろう。
ああ娘の心遣いが身に沁みる。
心にまで沁みるこの甘さ……。これぞ至高の一時だ。

「魔理沙さんはどうされますか？」
「私はブラックでいい。砂糖とかミルクは邪道なんだ。
大人な私は、コーヒー本来の味を楽しむのさ」
――ふふん、分かってない小娘だ。
少しずつ味を調節していくのが玄人というものなのに。
ブラック党を気取って通ぶるなど、小娘には百年早い。
……それにしても、この娘はなぜ我が物顔で、私の家に居座っているのだ。
招待した覚えは欠片もないのに。
「寛いでる所悪いのだけど、貴方何しにきたの。
というより、勝手に家に入るのは泥棒よ」
「細かいことを気にしてるとシワが増えるぞ」
「いいから要件を話しなさい。いい加減にしないと殴るわよ？」
減らず口ばかり叩く生意気娘め。

美咲の教育に悪いから、絶対に近づけたくなかったものを。
最悪である。

「いやいや。お前に『娘』がいるとさっき小耳に挟んでな。
ついつい遊びにきてしまったのさ。
お前らがタラタラ飛んでる間に追い越してしまったので、
お先に失礼していたという訳だぜ」

なぁ、と懐っこい笑顔を美咲の方に向ける。
いつのまにか自己紹介まで済ませていたらしい。
巫女やら、人形遣いやら、図書館女など手広くちょっかいを出してる癖に
まだまだ足りないらしい。末恐ろしい女だ。
いつか刺されることだろう。

この女、魔法使いとしては平凡だが、弾幕ごっこルールでは強敵となる。。
その速度を活かしつつ、大出力の魔法を駆使し、かなりの勝率を納めている。
人間でも妖怪に勝てるのがスペルカードルールとはいえ、小憎らしいことだ。
更に憎たらしいのが、私の得意魔法を平然とパクリやがったことだ。

「そう。じゃあ十分満足したわね。
お帰りはあちらよ。とっとと出て行きなさい」

ドアの方に手を差し出す。こいつにはさっさと帰ってもらったほうが良い。
何だか嫌な予感がするのだ。これが虫の知らせというヤツだろうか。
ちなみにリグルとは何の関係もない。

「そう慌てるなよ。実はお前と楽しくゲームをしようと思ってさ」
ドン、と机の上に大き目の袋を置く白黒。全く意味が分からない。
「なぜ貴方と私でゲームをしなければいけないのか、まるで理解できないわ。
――さっさと帰りなさい。というか帰れ」
シッシッと手を振って、追い払う仕草をする。
それを見ても、相変わらず落ち着いている様子の魔理沙。
おのれ、人間風情が妖怪を舐め腐った態度を取るとは。
ここ最近妖怪も舐められすぎだと私は思う。
娘が傍にいなければ、外に連れて行って即座にタコ殴りだ。
――昔だったら話を聞く前に血祭りにあげていただろう。
私も甘くなったものだ。良いことか悪い事かは分からないが。

「フフン、負けるのが怖いのか？　大妖怪風見幽香ともあろう者が」
「そんな安い挑発には乗らないわよ。顔を洗って出直してきなさい」
見え透いた挑発だ。馬鹿馬鹿しい。
そんな『挑発』に乗るのは知力３０以下の猪武者だけ。
私が掛かると思ったら大間違いである。
「おい聞いたか美咲。お前の母ちゃん負けるのが嫌で、逃げ出すらしいぞ。
本当情けないなぁ。戦わずして負けるなんてな」

「ゴホン。それでいったい何で勝負するのかしら。仕方ないから付き合ってあげるわ。
この私が勝負から逃げるなんてありえないもの」

その言葉を聞いた魔理沙は、ニヤリと微笑む。
まんまと策に乗ってしまった気がするが、これは大妖怪の余裕というやつだ。
決して美咲に格好悪いところを見せたくないからではない。
敢えて挑発に乗ってやったのだ。

「勿論弾幕ごっこだ！……と言いたい所だが、それは次の機会にしよう。
今日の勝負はこいつだぜ！」

ジャジャーンという効果音と共に、袋から妙な円盤が何枚かついた『塔の模型』が現れた。
実に安っぽい感じの。

「こ、これは……！？」

隣で見ていた娘が驚きの声を上げる。
この娘が驚きを現すのは実に珍しい。

「知っているの？　美咲」

「はい母様。場所は古代イタリア。
ピサの斜塔にて行われた『処刑方法』をモチーフにしたといわれる――」

「――そう知る人ぞ知る、『ぐらぐらゲーム』だぜ。ちなみに対象年齢は６歳以上だ」

「ぐ、ぐらぐらゲーム？　何よそれは」

そう言いながらカラフルな人形を並べはじめる白黒。
鼻歌交じりで、実にご機嫌である。

「この色つきダイスを振って、出た色と同じ色の人形を、同じ色の階層に交互に乗っけていくんだ。
２４体の人形が先になくなったほうが勝ちだぜ。
バランスを崩したらアウト。人形は落としたやつが引き取るんだ。
簡単だろ？」

……確かに簡単だ。落ち着いて冷静にプレイすれば私の勝利は揺るがない。
私にはプレッシャーなどというものは通用しないのだから。
逆に精神的に脆い所のある魔理沙など、私が一睨みするだけで震えあがってしまうだろう。
ククク、鴨がネギを背負ってきたとはこのことだ。
ネギどころか、鍋までついてきたようなものである。
鴨葱魔理沙。今度からそう心の中で呼んでやるとしよう。

「……先攻は私で良いのかしら？
貴方、これで遊んだことあるでしょうから、当然良いわよね」

この条件を呑ませる。そうすれば私の勝ちだ。

「ああ勿論構わないぜ。何か賭けないと勝負は盛り上がらないよな。
負けた奴は、勝った奴の言うことを一つ聞くっていうのはどうだ？」

「別に構わないわよ。勝負を終えた後の貴方の顔が楽しみね。
泣いても喚いても、絶対に命令に従ってもらうわよ」
魔理沙を見下ろす。それに対し、挑戦的に微笑んでくる白黒。
本当に小生意気な顔をしている。抓ったら気分が良いだろう。

「その言葉そっくりそのままお返しするぜ！」

……本当に愚かな小娘。
この風見幽香に精神的動揺によるミスは決してない。
つまり人形を置くなどという単純作業を、私がミスするなど絶対にありえない。
幻想郷の『精密殺人機械』と呼ばれた私からしたら超ｅａｓｙレベルである。
ちなみに命令は既に決まっている。

『二度と娘に近づくな』。シンプルな命令だ。

おまけに、悔しがるこの小娘の顔を見れるなんて一石二鳥。
既に見えた勝負の結果にほくそ笑んでいると、

「っと、美咲こっちに来いよ。お姉さんと一緒に遊ぼうぜ。
そんな所で立っててもつまんないぜ」

ニコニコと美咲に微笑みかけ、手招きする魔理沙。
美咲が尋ね返す。

「私が一緒で良いんですか？」

「見てるだけなんてつまらないからな。さぁ来い我が妹よ」
誰が妹だ。思わず突っ込もうとした私の隙を突き、
強引に私の娘を引き寄せる魔理沙。
さらに美咲を膝の上に乗せて、私と相対する形になる。
は、話が全然違うわ。この構図には決定的な過ちがあるじゃない！
その役目は私の物なのに！
「ちょっ、ちょっと待ちなさい！　なんでアンタが私の娘を抱えているの！？
わ、私と一緒に遊びましょう。さぁこっちへいらっしゃい！
そんな不良娘に近づいては駄目よ！！」
両手を広げてアピール。親子の繋がりは水よりも濃いのだ。
そんな不良魔女に近づいてはいけない。
今すぐに取り返さなくては！
「……えっと」
「――おいおい嫉妬か？　いいから早くダイスを振れよ。さぁさぁ！」
強引にダイスを私の手に握らせる白黒。
「ちょ、ちょっと！　私は納得していないわよ！」
「うるさい奴だな。ダイスを握ったら、１０秒以内に振らないと負けなんだぜ？」

「そ、そんなルール説明しなかったじゃない！」
「今決めたのさ。ほらほら、後５秒しかないぞ？」
「この野郎！！」
「私は野郎じゃない。花も恥らう乙女だからな。
ほれもうすぐタイムアップだぞ」
その言葉にグギギと歯軋りしながらも、なんとか冷静さを取り戻し
ゲームに臨むことにする。
ゼロになるまえにダイスを振る。
駄目だ。落ち着かなければ勝利が揺らいでしまう。
そう、ここはクールに。ＢＥ　ＣＯＯＬ。私は常に冷静なのだから。
勝てば良いのだ。勝てば。

――――少女遊戯中――――

流石に２２巡目まで来ると、かなり微妙で絶妙なバランスになって

きた……。
いつ崩壊してもおかしくないように見える。
心の動揺が、即座に崩壊へと繋がるだろう。
しかしながら、私に『敗北』の二文字はありえないのだ。
常勝無敗。豪華絢爛。それこそが風見幽香の二つ名よ。

「――さぁ貴方の番よ。後２つ乗せたら私の勝ちが自動的に決まるという訳ね
言い訳の準備は宜しいかしら？」

ニッコリと微笑んで睨んでやる。もちろん魔理沙だけをガン見だ。
視線で人を殺せるならば、こいつは１００回ぐらい閻魔の顔を見ていることだろう。
負のオーラを思い切り浴びせてやる。

「おお、こわいこわい。さぁ私たちの番だぜ。
美咲、ドンと良い目を出してくれよ」

娘の頭を撫で撫でしながら、美咲の小さな手にダイスを渡す。
……この女、さっきからやたらと『スキンシップ』をしている気がしてならない。
気安く私の娘に触るんじゃない！　と声を大にして言いたい。
このタラシめ、女なら種族も年齢も気にしないというのだろうか。

「はい魔理沙さん。私も頑張ります」

「おお良い意気込みだぜ。さぁ今こそ偉大な母親を越えるときだぜ！」

「……母様を、越える？」

「そうだぜ。二人でギャフンと言わせてやろうじゃないか」
私の方を失礼にも指差し、ニヤリと笑いかけてくる魔理沙。
明らかに私を怒らせ、動揺させようとしているのが見え見えだ。
ここは我慢。我慢我慢我慢、
……安い挑発に乗ってはいけない。心頭滅却心頭滅却。
怒りを抑えるのよ、幽香。私は冷静。私は冷静。

魔理沙は危なげなく人形を乗せ、また私に手番が回ってくる。
「ほいっと。さぁ、お前の番だ。
そろそろ何かが起こりそうな予感がするぜ。
気をつけないと崩壊するぞ？」

この白黒、崩壊しそうだというのにホイホイと人形を置きやがる。
しかしながら先攻はこの私だ。ミスしない限り私の勝ちは絶対に揺るがない。
手持ちの人形を先に無くせば良いのだから。
つまり、このゲームは絶対的に先攻が有利というわけだ。
「ふふ、動揺を誘おうとしても無駄よ。年季が違うのよ貴方とは。
そろそろ敗北の味を知りたいわ」
「そうかいそうかい。そろそろ味わえるから楽しみにしとけよ」
「フフ。期待しているわ」
ひよっこが心理戦を仕掛けるなど１００年早い。

ダイスを振り、指定の人形を塔に乗せる。容易いことだ。
左手は添えるだけ。右手に全意識を集中させる。
そーっと揺らさないように。……そーっとだ。

――乗った。

さぁ、後は指を離すだけ。決して揺らさないように。
ここが一番気をつけるべきところ。
最後まで油断してはいけない。

「キャッ！　ま、魔理沙さん、い、一体何を！」

美咲の慌てふためく声。今までこんな声を聞いたことはない。
私は何事かと思わず視線を移してしまう。
そこには、身体を捩じらせる美咲と、手先をワキワキさせている色情魔女。

「ふふ、まぁ固いこと言うなよ。そらそら。
ここが弱いのか？　ほれほれ」

「――あ、アアアアアンタっ！！　子供相手に何をしてるのっ！？」

し、しまった！　手に思わず力がっ！！
塔が崩れ――。

――アッ。

・塔方花映塚
人生の勝利者　霧雨魔理沙＆ａｍｐ；風見美咲
負け犬　　風見幽香

第四話　塔の上の死闘（後書き）

ぐらぐらゲーム。
子供の頃遊びました。
懐かしいです。

第五話　逆転のない裁判

・是非曲直庁？

トンネルを抜けると、そこは裁判所だった。
雪国ではない。

「それでは、被告人『風見幽香』に判決を申し渡します。
自らの行いを省みて、心して受け止めるように。
――って、私の話を聞いていますか？」

偉そうに私を見下ろす子閻魔。
いきなり何を言っているのか、さっぱり意味不明だ。
大体ここはどこなのだろう。
魔理沙と勝負した後の記憶があやふやで、何が何だか分からない。
とにかく私の家ではないことは確かのようだ。
さっさと帰ることにしよう。
晩御飯の準備をしなくてはいけない。
主婦の一日は忙しいのである。子閻魔と遊んでいる暇などないのだ。

「……なんだか良く分からないけれど、ご高説は結構よ。
早速で悪いけれど、私は家に帰らせてもらうわね。
お説教はまた１００年後ぐらいにお伺いするわ」

私の言葉に対し、子閻魔は心底呆れかえった様な視線を向けてくる。
「貴方は、今までの話を全く聞いていなかったのですか？
死んだ者が一体どこに帰るというのです。
……長く生き過ぎて更におかしくなったのですか」

元から少しおかしかったから、それも仕方のないことかもしれませんと呟く。
……どうやら私に喧嘩を売っているようだ。
買ってやっても良いのだが、時間が勿体無い。
今日の所は見逃してやろう。
でも後で必ず報いを受けさせる。

「今日の所は見逃してあげる。私は忙しいから。
餓鬼はそこで大人しく妄言を吐いていると良いわ。
――それでは、御機嫌よう」

小馬鹿にしてやった後、恭しく一礼をして飛び立つ。
いや、飛び立とうとしたのだ。
だが、脚がまるで鉛のようになったかのように微動だにしない。

一体どういうことだ。自分の体の一部ではないような感覚だ。
何らかの攻撃でも受けているのだろうか。

「……貴方の行き先はもう決まっているのです。
自由気侭に飛べるわけがないでしょう。
既に白黒はついてしまっているのですから。
貴方の辿りつくべき場所は唯一つ。
己が死んでいるということも忘れているようですし、
特別にもう一度体験させてあげまあしょう」

特別の特別ですよと、ニッコリと人差し指を立てる子闇魔。
実に憎たらしい奴だ。
闇魔が取り出した『鏡』から光が溢れ、私の体をゆっくりと包んでいく。

――ああ、光が見える。

「さてさて、敗者はひとつだけ、勝者の命令を聞かなくちゃいけないはずだったよな。
幽香ママの恥ずかしい話でも暴露してもらおうか。
それとも王道の焼き土下座にしよっかなー」

ニヤニヤと微笑みながら、勝利宣言を行う魔理沙。

「……ギャフン」

私はグゥの音もでない。ギャフンとしか言うことが出来ない。

あんな見え見えの罠に嵌ってしまうとは。
悔しさと恥ずかしさで、机に突っ伏したまま顔を上げることができない。
手には『赤の人形』を握り締めたままだ。
たかが人間の小娘ごときに遅れを取るとは、一生の不覚。
我が妖怪人生の最大の汚点となってしまった。

「なーんてな。お前への命令は実に単純、シンプルこの上ない話だ。
この夏の間、お前の娘をウチで預からせてもらうぜ。
ちなみに拒否権はないからな」

えーと、今この女はなんと言っただろうか。
『このなつのあいだ、むすめをうちであずかる』

――預かる？　誰が？　魔理沙が。

ガバッと即座に起き上がる。
何をほざいてやがるのだこの不良娘は。
冗談はその時代錯誤の魔女服だけにしておくべきだ。

「馬鹿馬鹿しい！！　そんな命令を呑む訳がないでしょうッ！
良く考えてから物を言いなさい！！」

思わず顔を真っ赤にして、家全体に響くぐらいの大声を上げてしまう。
うっかり手が出なかっただけでも自分を褒めてあげたい。
娘の見ている前で暴力はいけない。
――鎮まれ私の怒れる右腕よ。

「おいおい、そういきり立つなよ。約束は守るべきだぜ。
それに、これは美咲のお願いでもあるんだぜ？　なぁ美咲」
私は疼く右腕を押さえつつ、視線を娘の方に向ける。
嘘よね？　という願いを籠めて。

「はい母様。しばらくの間だけ許してください。
これは必要な事なんです。私が強くなるために」

いいい、いくらなんでもそのお願いには応えてあげることは出来ないわ。
ぜええええっったいにＮＯよ。私はＮＯと言える妖怪なのよ。
――家出、駄目絶対。

「ダメに決まってるでしょう！　……美咲、貴方少し疲れているのよ。
さぁ今すぐベッドで一緒に休みましょうね。私が子守唄を歌ってあげるわ。
ゆっくりと休めば、きっといつもの貴方に戻るわ」

美咲の手を握り、寝室の方へ向かおうとする。
一休みすれば気持ちもリフレッシュするに違いない。
もう二度と白黒飛行物体なんか見ることがないように、私がいつまでも隣にいてあげよう。

「――母様。私が魔理沙さんに、弾幕ごっこの特訓をしてくれるようお願いしたんです。

ですから、お願いします」

今まで見たことがないくらい真剣な目で私の目を見つめてくる。
思わず首を縦に振りそうになるが、グッと堪える。
駄目だ。いくら娘でもそんなことは許されない。
白黒のところになんか行かせたら不良になってしまう。

「だ、弾幕ごっこなら私が教えてあげてるじゃない。何を言っているの。
今までも、そしてこれからも私が何でも教えてあげるわ」

「お前こそ何を教えてきたんだ。あんなもの『弾幕』じゃないじゃないか。
いくら可愛がっているからって、あれじゃ可哀想だぜ」

魔理沙が呆れ顔で口を挟む。

「フン、そんなもの張る必要ないわ。
私が教えたスペルだけ使えればそれでいいのよ。
万一敵が来たら、即座に私が出て行くのだから。
二度と朝日が拝めないように、徹底的に叩きのめしてあげるわ」

腰に手を当てて言い切る。
弾幕を教えて欲しいといった我が娘。
戦わせるつもりなどこれっぽっちもなかった。
が、万が一の場合に備えて、スペルカード花妖『風見幽香』をプレゼントした。
大きな弾を空高く打ち上げて、大きな一輪の花を咲かせる美しいスペル。
別名『打ち上げ花火』とも呼ぶらしい。

一種の信号弾になっていて、私はどこにいても気付けるようになっている。
そのＳＯＳが打ちあがったら、私が超高速で駆けつけるという寸法。
全くもって完璧。最強のスペルだと自画自賛できる。

「……餡蜜にハチミツをたっぷりかけて、さらに砂糖をぶちまけたぐらいにゲロ甘だぜ。
胸焼けして、吐きそうだ。
お前は物事を教えるのに全くもって向いていないな。
このままじゃ無菌超箱入り娘一直線だぜ」

「私の教育方針に口を出さないで頂戴」

「私は良いんだが、お前の娘はそうは思ってないみたいだぜ？」

その言葉に、私は美咲を見つめる。
確かに、どこか不満そうな表情を浮かべている。
おかしい、何がいけないのだろう。

「……このままじゃ埒が開かないと思って。
それで基礎から弾幕ごっこを勉強しようと博麗の巫女に相談しました。
ルールを考案したと言われる幻想郷の守り手に。
そうしたら、『私は面倒だから、代わりを紹介してあげる』と言われて――」

「――私が呼ばれたという訳さ。ちなみに報酬はきのこ養殖の手伝いと、新鮮な野菜だぜ。
お前の娘は植物育成が得意らしいじゃないか。私の助手に相応しい。
さて、それじゃさっそく行くとするか。善は急げって言うしな」

娘の手を引いてドアから出て行こうとする魔理沙。
それに大人しく付き従う我が娘。

「ままま、待って！　私の言うことを聞いて！
今度からきちんと厳しくするから！　だから――」

「……本当にごめんなさい。でも必要なことなんです」

そういい残し、二人は去っていった。
無常にも閉まったドアを呆然と眺める私。
視界が徐々に狭くなる。

――私は目の前が真っ暗になった。

眼前に起きた光景を信じることができずに、呆然と立ち尽くす私。
今の映像は一体なんだろう。良く分からない。

「思い出しましたか？　貴方は親馬鹿すぎて、ついには死んでしまったのです。
最期は愛する娘に愛想を尽かされて、捨てられてしまうなんて可哀想に。
身から出た錆とはいえ、少しだけ同情します」

光が鏡に納まっていく。さっきまでのは幻だったのだろうか。
……そんなことより！

「ちょ、ちょっと待ちなさい。私がそんな簡単に死ぬわけないでしょう！！
あんな幻影なんか見せて私を騙そうとしたって、そうはいかないわよ。
早く私を元の場所に帰しなさい！　今すぐによ！！」

激昂して闇魔の元に突っ走ろうとする。
が、やはり足が動かない。
それを冷たい視線で見下ろす四季映姫・ヤマザナドゥ。
売られていく子牛を見るような目。ドナドナ。

「――このまま生き続けてもろくな事にならない。
あの時言った通りの結末になりましたね」

「い、一体何を言っているの？」

「独りよがりな愛情はもはや罪です。貴方は業が深すぎるのです。
賽の河原で、永遠に色付き人形を斜塔に積む作業を繰り返すと良いでしょう」

「――ちょ、ちょっと」

「それでは、さようなら。向こうでもお達者で」

ポチッと大きなボタンを押す閻魔。パカっと開く床。ヒューと落ちる私。

これはいわゆる落とし穴という装置だ。

今起きていることが夢であることを心から願いつつ、

私は更に深い闇の中に堕ちていくのだった。

真・親馬鹿花妖怪　おわり

・四季映姫・ヤマザナドゥ

白黒はっきりつける程度の能力

第五話　逆転のない裁判（後書き）

異議あり！

第六話　賽の河原なう

『おわり』とかこの前言ったような気がするけど。
ごめんなさい。あれはウソだったわ。
もうちょっとだけ続くのよ。
だからお願い。この悪夢から、誰か助けて頂戴。

・賽の河原？

ひとつ積んでは娘のため、ふたつ積んでは娘のため、みっつ積んでは……。
目の前の河を虚ろな瞳で見つめながら、ひたすらに指を動かす。
また今日も、人形を斜塔にひたすら乗せる作業が始まる。
この作業に一体なんの意味があるのか。
余り考えたくないが、きっと何の意味もない。
「おーい、ブツブツ独り言呟いてる暇なんかないぞ。
さっさと人形を塔に積むんだ。さぁさぁ！」

酒臭い息を吐き散らしつつ、私に命令してくる子鬼。
というかなんで、こいつがここにいるのだろう。
意味がわからない。同じ鬼とはいえおかしいでしょう。
貴方はお山の鬼さんじゃない。
地獄の鬼さんじゃないのよ。

「いやなに、面白い妖怪がここにいるって紫に聞いてさ。
居ても立ってもいられなくなってやってきちゃったよ！
えーとなんだっけ。そうそう、短期アルバイトってやつさ」

ハッハッハッと豪快に笑いながら私の肩をバンバン叩く、泥酔した2本角。
その勢いは凄まじく、私の身体はその度にグラグラと前後に揺れる。
せっかく積んだ人形が、ボロボロと零れ落ちていく。
また一からやり直しだ。

「それにしても、親馬鹿が酷すぎて地獄行きって。
――ププっ。前代未聞だよ本当。
聞いた瞬間、息もできないくらいに大笑いさせてもらったよ。
天狗も馬鹿笑いしながら、新聞を狂ったように配っていたし！」

そんなことを聞いても全然嬉しくない。
恥ずかしくて、もう外を歩けない。
娘にも合わせる顔がない。

「アンタの娘は元気に暮らしているから、心配しないでドンドコ積んでおくれ。
魔理沙が妹みたいに可愛がっているからさ。霊夢もなんだかんだで気にしてるみたいだし。

ついでに言うと、私もさっき西瓜を食べさせてもらったよ！」
萃香が西瓜を食べるって！　共食いかよ！　と親父ギャグで腹を抱えている。
私は腸が煮えくりかえりそうだ。
言ってやったという得意気な顔が癇に障る。
そんな私の心情を、全く理解できない小鬼が与太話を続ける。

「だからさ、アンタはどんどんその塔に積んどくれ。
その色つき人形を、ゆっくりあせらず、それでいて正確に素早くね！
全部積み上げても何の意味もないけどさ！」

思わず人形を握りつぶす。
粉微塵にしてやったら、少しだけ気分がよくなった。
と同時に私の頭に人形が落ちてきた。
なるほど。壊したり、なくしたりしても誰かが補充してくるようだ。
まさに至れり尽くせり。

「ハハハ。ちゃんと見張ってるから無粋な真似は駄目さ。
破壊しても、直ぐに補充してあげるよ。安心しとくれ！」

瓢箪をラッパ呑みして、陽気にはしゃぐ馬鹿鬼。

「まぁ幽香もさ。子離れする良い機会だと思ってみなって。
もう2度と会うことはないだろうけどさ！！
親が無くても子は育つってね。人間も良いことを言うもんだよ！
ワハハハハ！」

ハハハこやつめ！　と私の背中をさらに思いっきり叩く。もうこれでもかというほど。

この所業、まさに鬼か悪魔のものである。

「ちょっ、ちょっとお願いだから揺らさないで頂戴！
また最後の一体で崩れ落ちるわッ！！」

『――香！　幽香起きて！』

「うるさいわね！　今集中しているんだから放っておいて！
あとこれだけなのよ！」

『いつまで寝ぼけているの。　いい加減目を覚まして！！』

……え？

――――――――――――――――――

「……え？」

私は思わず疑問の声を呟く。
妙に聞き覚えのある声がしたからだ。

「『……え？』じゃないよ幽香。３日間も魘されながら寝続けるなんて、頭おかしいよ。
人形がとか、塔が崩れるだとか、鬼のような形相で呟いてるし。
見ていて鳥肌が立つかと思ったよ」

あれが鳥肌が立つという感覚なんだ、と頷いている毒人形。
台詞にもさりげなく毒が混じっているようだ。

ああ、ここは天国だろうか。鈴蘭香る我が友人の声が聞こえる。
いっぱいいっぱい人形を積み上げたから、きっと天国に繋がったんだ。
これから私は鈴蘭畑の真ん中で穏やかな眠りにつくのだ。

「ごめんなさい、メディスン。私、少し疲れたの。
だから、もう少し眠らせてくれる？」

再び瞼を閉じようとした瞬間、首根っこをつかまれて引き起こされる。
意外にパワフルな人形だ。

「何言ってるの幽香。いくら年寄りだからって、我侭は許されない

よ。
起きたらまず顔を洗って歯を磨く！　子供じゃないんだから」
また悪口が含まれていたような気がするが、今はスルーしておく。
言われた通りに起き上がり、ふらふらとよろめきながら洗面所に向かう。
私は自由なのだろうか。もう二度とやらなくて良いのだろうか。
あの、何の意味もない人形積み作業を。

「そうそう、幽香宛に伝言を預かってるよ。美咲からね。
しばらく魔理沙の家に泊めてもらうから、後はよろしくって。
着替えとかも持ってったみたいだよ」

メディスンが何を言っているのか即座に理解できない。

魔理沙の家に泊まる？
一体誰が。
私の娘。
なんで。
弾幕特訓の為。

……。

「うがあああああああああああ！！
お、思い出したあああああっ！！
こんなことしている場合じゃないわ！
は、早く助けなければ、むむむ娘がタラシの毒牙にっ！」

私は髪を振り乱しながら絶叫する。

「……行き先は聞かなくてもわかるけれど、ごはんを食べてからね」

「え、ええ、そうね。貴方の言う通りだわ。
急がば回れというものね。だ、だから瘴気を引っ込めて頂戴」

何故かヒリヒリする額を私は擦る。
どこかでぶつけたのだろうか。

「もう出来てるから、今すぐ用意するね」

瘴気を発しながら、近づいてくるメディスンに思わず頷いてしまった。
まぁ良いわ。
腹が減っては戦はできぬと言うものね。
いつかあの閻魔は泣かす。ついでに子鬼もよ。

・伊吹　萃香
密と疎を操る程度の能力
密度を操る程度の能力

・メディスン・メランコリー
毒を操る程度の能力
毒を使う程度の能力

第七話　踊る毒人形

『到着っと。ここが霧雨魔理沙邸だぜ。遠慮せず入ってくれ』

魔法の森、霧雨魔理沙の住処。
幽香の娘を箒に載せて、全速力で帰ってきた。
あまりの速度に、風見美咲は少しヨロヨロとしている。

『はい。ありがとうございます。
でも母様は大丈夫でしょうか。少し、心配です』

無表情な顔を、少しだけ曇らせる。
魔理沙は安心させるように満面の笑みを浮かべた。
後始末はしっかりと頼んであるのだから。
暫くは邪魔が入る心配はない。

『なぁに大丈夫さ。ちゃんと世話役を手配してあるんだぜ。
今頃は良い夢を見ているはずさ。これから3日間くらいな』

帽子のずれを直すと、魔理沙は美咲の手をとり、
家へと入っていく。
まずは色々と話を聞くことから始めようと、魔理沙は考えていた。

メディスンが用意してくれた美味しいご飯を食べ終えて、私は一息つく。
黄金の一時、コーヒーブレイクというやつよ。
背もたれに寄りかかり、コーヒーを飲む

せっせと後片付けをしているメディスンを、遠目に眺めながら考える。
業火のように燃え滾る怒りをなんとか押さえつけ、冷静に物事を考えるのだ。
すぐに娘のところに向かわなければならない。それは当たり前のことだ。
だがその前にひとつだけ、確認しなければならないことがある。
とても重要なことだ。

「――ねぇメディ。貴方が起こしてくれた時の事なんだけど。
ものすごい勢いで、私の顔を叩いていななかったかしら。
これでもかというぐらいノリノリで」

頬を軽く撫でながら、努めて笑顔を作る。
油断すると素の表情に戻ってしまいそうだ。

「そ、そんなことするわけないじゃない。やだなぁ幽香。
ちゃんと優しく声を掛けて起こしたよ。本当、心配したんだからね」
ニッコリと微笑みかけてくる。天使みたいな笑顔だ。
いや、堕天使だっただろうか。
この顔に騙されてはいけない。

「あらそう。勘違いかしらね、私の顔に赤い痕があるのは。
貴方が以前の恨みを晴らすべく、今が好機とばかりに殴っていた。
――なんてことはあるはずないわよねぇ。そうよね、メディ」

拳をポキポキと鳴らしてみる。
徐々にメディスンの顔色が悪くなる。
何もうしろめたいことがなければ、顔色を変える必要はない。

「ね、寝転がったときについた跡だよ、きっと！
うん間違いないよ。だって私がそんな酷いことをするわけないし！」

そう言って、そそくさと食器を台所に持っていくメディスン。
話がこれで終わったとでも思っているのだろうか。

私は音を立てないようにその後を追い、毒人形の背後にそっと立つ。
ついでに可愛らしい頭を、リボンの上から思い切り鷲掴みにしてやる。
驚いた拍子に毒の瘴気が勢い良く漏れてくるが、今の私には全く通用しない。

「――ねぇメディスン。
何ともないのに、３日間も寝続けるなんて『おかしい』と思わない

かしら。
私はおかしいと思うわ。とても不思議に思うの。
あなたは変に感じない？　奇妙に思わない？　ねぇ、聞いてる？」
少しずつ万力のように力をこめていく。
締め付けるように。じわりじわりと。
「い、痛いよ幽香！　ほ、本当に私は何も知らないよ。本当だよ！」
無実であると、両手をジタバタとさせるメディスン。
「私は、変じゃないかと聞いているのよ。質問に答えなさい」
「ゆ、幽香最近疲れてたから。全然不思議じゃないし、奇妙でもないよ！
だ、だから手を離してっ！
これ以上やるなら美咲に言いつけるからね！」
更に暴れる毒人形。毒が威嚇の為に凄まじい勢いで噴出される。
部屋が毒で充満してしまった。往生際の悪い。
娘に言いつける？　終わった後もその元気があれば良いのだけど。
掴んでいる手の力を更に強め、顔を強引にこちらへと向けさせる。
「私が優しく笑っている間に全てを話しなさい。
今なら普通のお仕置きで済ませてあげるわ。
――後5秒以内に吐かないと、貴方が花畑を滅茶苦茶にした時と同じお仕置きをする。
一晩中、延々と実行するわ。貴方が泣いても叫んでも喚いても、絶対に許さない」

最後の宣告を告げ、攻撃的な笑みを毒人形に向けてみる。
メディスンは身体を震わせて、顔を見る見るうちに青くさせる。
「あ、アレは嫌だよ！　お、お願い許してっ！！」
「5」
「ほんのちょっと魔がさしただけ。ね？」
「4」
「カ、カウントするのをやめて！　ぜ、全部話すからっ！」
「3」
「こ、これを使ったんだよ！　ごめんなさいいっ！！」
慌ててポケットに手を入れ、震えながら私に小瓶を差し出す。
瓶には黒い丸薬が3粒入っている。……何かの薬だろうか？
「……誰に頼まれたの。霧雨魔理沙かしら？」
「う、うん。でも魔理沙はこっちの赤い方を数粒飲ませてくれって。良い夢が見れるから、気分がスッキリして疲れが一気に吹っ飛ぶって」
「へぇ」
そう言うと、反対のポケットから赤い丸薬が詰まった小瓶を取り出

す。
私はそれも受け取り、光に翳してみる。
こちらは新品で、使われた形跡はない。

「それで、疲れて気絶してる幽香に飲ませてあげようとしたの。
そしたら八雲紫がいきなり出てきて。
こっちの黒い薬の方が幽香は喜ぶって。だ、だから私は本当に良かれと思って」

どうやら叩いたのはただの悪ふざけで、この薬を飲ませたのは、本当に私を心配してくれてのことらしい。
問題はこの薬の正体だ。魔理沙の『良い夢を見られる』という台詞から推測すると、
この赤い丸薬は『胡蝶夢丸』と呼ばれるものだろう。
服用すれば、数粒で良い夢を見ながら眠りにつくことが出来る。

では、あの不愉快な隙間婆の渡した、この黒い丸薬はなんだろうか。
まぁ大体の予測はついている。が、念のために確認しておこう。
勿論実際に使ってだ。

「良く話してくれたわね、メディ。本当に偉いわ。
……ところで、この黒い薬をどれくらい飲ませてくれたのかしら。
赤い方はこんなに入っているのに、黒い方はもうたったの3粒しかないの。
数粒で効果は出るのでしょう？　不思議ねぇ」

話しかけながら、小瓶を開け黒い丸薬を手にとる。

「うん。沢山飲ませたら、もっと効果が出ると思って。
紫も『それは良い考えね』って言ってたよ。

だから、幽香の口に、もうこれでもかというほど詰め込んだの！」

「――そう。それじゃあ貴方にも、私と同じ幸せを味わってもらおうかしら」

黒い丸薬を強引に、毒人形の口に放り入れて飲み込ませる。
しっかりと飲み込むのを確認した後、解放してやる。

「うう、い、いきなり酷いよ幽香。……ちゃんと謝ったのに」

涙目の毒人形メディスン。
ほんのちょっとだけ罪悪感に襲われるが、済んでしまったことは仕方ない。
未来志向で生きなければ駄目だ。

「もう許したわ。驚かせて本当にごめんなさいね。少し休憩しましょうか。
ほら、なんだか眠くなってきたんじゃないかしら？
さぁ、ベッドに行きましょうね」

メディスンの手をとり、寝室に連れて行く。
お仕置きとしては温いけれど、今回はこれくらいで許してあげることにする。
悪戯ばかりするが、そんなに悪い奴ではない。
それに、娘の良い遊び相手でもある。

――――――――――――――――――――――――

激しく魘されているメディスンにタオルケットを掛け、私は出撃の準備を整える。

クローゼットの奥の方に隠してある、細長い箱の鍵を開け得物を手に取る。
これは優雅な装飾のついた日傘ではなく、相手を撲殺することを目的に作成した特注の日傘だ。
遥か遠い昔、数多くの人妖に血の花を咲かせてきた逸品である。
当然娘には見せたことなどない。知らなくて良いこともある。

準備を終え勢い良くドアを開けると、紫リボンのついた『巨大な隙間』が私を出迎えた。
あちらも、どうやら私とじっくりとお話がしたいらしい。
とても好都合である。

「――フフッ。丁度私も貴方に用があったの。
ゆっくりとお話がしたかったのよ？　ゆっくりとね」

日傘をクルンと回転させ、隙間の中に飛び込む。
溢れ始める殺気を、抑えることが出来ない。
あの糞婆とは、一度本気でケリをつける必要があると思っていた。
丁度良い。この機会にそっ首叩き落してやるとしよう。

胡蝶夢丸
胡蝶になった自分を楽しむという意味で名付けられた赤い丸薬。
寝る前に数粒飲むと悪夢を見ることなく、楽しい夢を見ることができる。

胡蝶夢丸ナイトメアタイプ
スリリングな悪夢を見て魘されることが出来る黒い丸薬。

第八話　柘榴の娘（前書き）

時間軸は、幽香が魔理沙との勝負に負けた後です。

第八話　柘榴の娘

文々。新聞　号外
『風見幽香氏、危篤状態！？　関係者に直撃取材を敢行！！』
先日お伝えした風見幽香氏に関連するニュースだが、急報が入った。
関係者の話によると霧雨魔理沙氏との一戦後、危篤状態に陥っているというのだ。

記者も事実を確認しようと、風見氏の自宅を訪ねたのだが
全く反応がなく、手がかりを掴むことはできなかった。
流石に自宅に侵入するのは躊躇われた為、
事情を良く知ると思われる人物に話を聞くことにした。

風見氏と親しい毒人形のM氏によると
「……幽香はね、ちょっとだけ眠っているの。
楽しい夢を見てると思うから、そっとしておいてあげて」
と悲しそうに語ってくれた。
風見氏の大親友だと自称する、妖怪の賢者Y氏は
「今頃せっせとお人形を積んでいるころじゃないかしら。フフフ」
と意味深な台詞を残し、去っていった。
風見氏の娘と噂されている人物の行方も、現在の所は分かっておらず、

事態は混迷としている。
我々としては、一刻も早い風見氏の回復を祈るばかりである。
（射命丸　文）

―――――――――――――――――――――

・霧雨魔理沙邸

「よし、まずは服を取り替えるとするか。
何事も形から入らないとな。
私のお古があるから、暫くそれを着ていてくれ。
今度ちゃんと新しいのを用意するからさ」

ほれ、魔理沙は黒い魔女服を放り投げる。
とんがり魔女帽もセットだ。
それを手に取り、美咲は興味深そうに観察している。

「ありがとうございます。魔理沙さん」

「なーに。礼は良いってことさ。
さ、とっとと着替えて来てくれ」

「分かりました。隣、お借りします」

美咲は奥の部屋に行き、着替えを始める。
幽香とお揃いのチェック柄の洋服は、
丁寧に畳んで鞄にしまっておく。

着替え終わり鏡を覗くと、そこには小さな魔女が映っていた。
魔理沙のように、白いエプロンはついていない。
黒一色の、魔法のローブである。

「そろそろ着替え終わったか？」

ドア越しに聞こえる魔理沙の声。

「はい、終わりました」

「どれどれっと。おおー似合ってるじゃないか。
これで立派な見習い魔女の出来上がりだぜ。
今度魔女同盟を結成して、お茶会をすることにしよう」

そう言うと、美咲の頭に特徴的な帽子を乗せた。

「私似合ってますか？　うふふ」

口元を歪ませて、うふふと笑い始める美咲。
幽香ばりの凶悪な笑みに、魔理沙の顔は引き攣った。
その笑い方に、忘れたい過去を思い出してしまったこともある。
いわゆる、黒歴史というやつだ。

「そ、その笑い方はあまり宜しくないんだぜ。
頼むから、いつも通りにもどってくれ」

「どうかしたんですか？」

いつもの表情に戻り、首を傾げる。
魔理沙は引き攣った顔をほぐそうと、手で頬を撫でている。

「い、いや。ちょっと消したい過去を思い出してな。
――そんなことより。後で魔力を込めた箒かデッキブラシを作ってやるぜ。
まだ飛ぶのに慣れてないみたいだし」

「……箒は分かりますが、デッキブラシで空を飛ぶんですか？」

「由緒正しい見習い魔女は、デッキブラシでも空を飛ぶんだぜ。
その場合、赤いリボンは必須アイテムだな
」
胸を張って得意気に笑う魔理沙。
紅魔館の図書館で見た文献に載っていたのだ。
勿論その本は参考の為にしっかりと借りている。
当然返していない。

「じゃあ早速、座学から始めようかといいたいところだが……。
ひとつ、聞きたいことがある。
とても大事なことだ」

魔理沙は話しながら、椅子に逆側に座る。
先程までとは違い、真剣な表情で美咲を見つめる。

「……なんでしょうか？」

「なんだってそんなに弾幕ごっこの特訓をしたいんだ。
あいつだって超親馬鹿とはいえ、少しずつ教えてくれるはずだぜ。
わざわざ妖怪が人間に頼むことなんかないんじゃないか？
しかも、よりによって霊夢に頼むなんてな」

あの巫女様が教師役なんて、天地がひっくり返っても無理だぜと手を大袈裟に振る。

「……」

「答えたくないのか？」

「――勝てるかもしれないから」

「ん？　なんだって」

「力の弱いものでも、対等に闘える弾幕ごっこなら、私でも、母様に勝てるかもしれないから」

魔理沙に答える。
その拳は強く握り締められている。

「……成る程、母親を乗り越えたいか。
熱いねぇ。嫌いじゃないぜ。
そういう話は、私は大好きだ」

椅子の背もたれに腕をついて、うんうんと頷づく魔理沙。
美咲はさらに騙り続ける。

「母様を私は越えたいのです。
そうすれば、私はようやくこの世界で自分の存在を認めてもらえる。
母様もきっと、私の事を認めてくれる。
分かりますか、魔理沙さん」

「そ、そうか。でもアイツだって別にお前を認めてないわけじゃ――」

「認めてないですよ」

言葉を遮り言い捨てる。

「……どうしてそう思うんだ？」

「今の私はただのお人形。愛玩動物のようなものです。
私は、母様に一人の『妖怪』として認められたいのです。
そうしなければ、私は」

無表情で淡々と語る。
魔理沙は背筋に少しだけ寒気が走るのを感じた。

「……深く考えすぎだと思うがなぁ。
もっと明るく生きないと、人生面白くないぞ？」

「……」

「ま、そういった事情で私に特訓を受けたいと言う訳だ。
弾幕ごっこで実力を見せ付けると。
自分もこれだけ出来るんだぞと、アイツに認めさせたいわけだ」

幽香が聞いたら卒倒するんじゃないかと思う魔理沙。
なんだか複雑そうだなぁと思いながらも、それは口には出さない。

確認の言葉に、美咲は首を縦に振る。

「はい。その通りです」

「なるほどね。大体わかったぜ。
やっぱりちゃんと話してみないと、人は分からないもんだな」

「お願いします魔理沙さん、私に弾幕を教えてください。
どうか、お願いします」

頭を深くさげた拍子に、とんがり帽子が転げ落ちる。
魔理沙さんは、立ち上がり落ちた帽子を拾う。
パンパンと埃を払い、小さな頭にヒョイと乗せる。

「返事は前にしたはずだぜ。もう一度再確認しただけさ。
まぁ私も傲慢な巫女様を這い蹲らせるために、まだまだ修行中の身だけどな。
お互い目標達成のために頑張ろうぜ！」

白い歯を見せて、手を差し出す白黒の魔女。
美咲力強く握り返す。

美咲は決意する。

（一日でも早く追いつけるように、これから一生懸命努力しよう。
そして、良く頑張ったと認めてもらうのだ。大好きな母様に。
そうすれば、私はこの世界で生きていくことが出来る。
存在が認められるのだ）

「じゃあ早速授業にするとしようか。

そのうち自称都会派の性悪魔女と、
図書館の引き篭り魔女を紹介するからな。
個性的で愉快な奴らばかりだぜ」

「――はい。これからよろしくお願いします」

残された時間は、それほど多くはない。
掛けられた魔法は、いずれは消え去るのだから。
奇跡は長く続かない。
美咲は本能的にそれを感じ取っている。

その不吉な予感は誰にも話したことはない。
数少ない知り合いであるメディスンにも。
勿論母になど言える訳がない。
意外と精神的に脆いところがあるのだから。

泡になって消えるのか、潰れた果実のように崩れ去るのか。
それとも最初から存在がなかったことにされるのか。
それは神のみぞ知るという奴だ。

美咲は思考の渦から抜け出す為に、首を振る。
不安を押し隠すように、親指の爪を噛む。
自分だけが知る悪癖。母親に見つかったことはない。
魔理沙にそれを見られると、誤魔化すように手を振った。

・柘榴

ザクロとはザクロ科ザクロ属の落葉小高木、また、その果実のこと。
花言葉は優美、円熟した優美、優雅な美しさ。

・柘榴の神話

釈迦が、子供を食う鬼神「可梨帝母」に柘榴の実を与え、人肉を食べないように約束させた。
以後、可梨帝母は　鬼子母神として子育ての神になった。
柘榴が人肉の味に似ているという俗説は、この伝説より生まれた。

ｗｉｋｉ先生より

第八話　柘榴の娘（後書き）

色々と事情はありますが、歪んでます。

第九話　本当は怖い、まだ蕾

妖しげな隙間を通り抜け、見知らぬ大地に私は降り立つ。
見渡す限り荒野で、生きている物の気配はしない。
幻想郷なのかも分からない。
辺りを注意深く見回し、警戒態勢をとる。
近くにはいないようだが、確実に奇襲を掛けてくるだろう。

……それより、さっきから何故かは分からないが、嫌な予感がしてならない。
なんというか、既に取り返しのつかない事態が進行しているような。
蟲の知らせというやつであろうか。
脳裏に浮かぶ、魔女っ娘の姿。
私はそれを強引に振り払う。

いずれにせよ、やることは唯一つだ。
嫌がらせに精を出す『怪異ムラサキババァ』を成敗して、
さっさと娘のもとに向かうとしよう。

紫の誘いに乗って、隙間に敢えて突入したのには訳がある。
無視して魔理沙の元に向かった所で、必ず邪魔が入るはずだ。
ならばこちらから乗り込んで、予めケリを付けておいた方が良い。

重量のある日傘を肩に乗せてリズムを刻む。
一息ついて、いよいよ歩き出そうとした瞬間。
背後から、胡散臭い口調で声を掛けられる。
一切の気配を感じさせず登場するあたり、相変わらずの化け物だ。

「ハァイ、ゆうかりん。この3日間良い夢が見れたかしら。
ハラハラドキドキ出来たでしょう？　高かったのよアレ」

「――死ねッ！！」

私は問答無用で、振り向き様に鈍器を叩きつける。
相手の顔面目掛けて、一切の手加減を加えずに。

――残念ながら潰した手応えがない。
肉を破り、骨を粉砕する独特の感触がないのだ。
紫の顔付近に生じた隙間でガードされたようだ
そのまま強引に叩き潰してやろうと、歯を食いしばりながら妖力を籠める。

その隙に乗じて、背後に複数の隙間を展開するスキマ妖怪。
ぬめりと異質に開いた空間から、ウジャウジャと蠢く触手のようなものが現れる。
使役する妖怪の性格が現れているかのように、混沌として実に不愉快だ。

「いきなりご挨拶ね。そんなことでは良いお母さんになれないわよ。

それより酷いわ幽香、あんな可愛い子を私に隠しておくなんて。
後でちゃんと紹介して頂戴ね？」

展開している隙間に腰掛け、口元を扇子で隠しながら優雅に微笑んでくる。

私はそれに答えることなく、バックステップで直ぐに距離を取る。
触手が攻撃態勢に入ったのを確認したからだ。
絡め取られると厄介。相手をさせる下僕を呼ぶことにしよう。

左手を地面に思い切り叩き付け、能力を発動させる。

「八つ裂きにした後、綺麗に消化してあげるわ。
骨まで残さずにね」

大地を割り、轟音を上げながら召喚される魔界の食虫植物。
蕾の先が歪に割れて、鋭利な牙が見え隠れする。
目に当たる部分は虚ろに光り、その身体はゆらゆらと不気味に揺れている。
こいつは雑食だから何でも食べる。妖怪だろうが人間だろうがお構いなしだ。
早速目の前にいる妖怪を、綺麗に片付けるように命令を下す。

「魔界の蕾よ。眼前の敵を喰い殺せ！！」

「そんなモノを呼び出したりしてはいけないわ、幽香。
私の愛する、穏やかで平和な幻想郷には似合わないもの」

困ったような表情で言い放つと、扇子を閉じ指を軽くパチンと鳴ら

す。
――瞬間、展開していた隙間から一斉に触手が伸びてくる。
包囲するように幾重にも張り巡らせ、私の食虫植物を絡め取ろうとする。
食虫植物は、本能のまま唸り声を上げ、触手を引き裂きながら前進を開始する、
だが、その度に隙間から触手が伸びてくる。このままでは埒があかない。

「――何を考えて、あんな薬を飲ませてくれたのかしら。
おかげで、素晴らしいナイトメアを楽しむことができたわよ。
お礼をしてあげないといけないでしょう？　その身体にたっぷりとね」

会話をしつつ、更に植物召喚の準備を整える。
次はあの隙間婆の左右と背後だ。
四方から喰いつかせて一気に終わらせてやる。
流石に殺すことは出来ないだろうが、胃液まみれのぐちゃぐちゃにしてやろう。
それだけであいつのプライドを傷つけることが出来る。

「フフッ。怖い目ね。あの娘が見たら何て言うのかしら。
やっぱり柘榴の実がないとダメみたいね。幻想郷の鬼子母神さん」
優雅に扇子を煽ぐ紫。余裕綽々の表情を浮かべている。
そのふざけた顔が、胃液に塗れるまで後僅か。
実に楽しみではないか。

「娘に関わるな。その姿を決して見せるな。

あの子に近寄る事は絶対に許さないわよ」

「そんなつれない事を言わないで頂戴、幽香。
別に何かしようだなんて考えていないわ。
それに、あの薬はちょっとしたイタズラみたいなものよ。
別に深い意味はないのよ？」

全く悪びれる様子なしに謝罪してくる。
こいつは昔からそうだった。
意味ありげな行動や台詞を吐いて、人を煙に巻こうとする。
相手にしないのが一番の対策なのだが、今回はそういう訳にもいかない。

「これが最後よ。私の邪魔をしないでくれるかしら。
そして二度と娘に関わろうとするな。
お願いじゃなくて命令よ」

「……これでも、昔に比べたら『角』がとれて丸くなったかしら。
かつての貴方なら、聞く耳など持たずに即座に攻撃してきたもの。
長い歳を経て落ち着いたのね。それは素晴らしいことよ」

穏やかに微笑む紫。
相変わらずの胡散臭い表情だ。
昔と変わらないその顔に、私は少しだけ毒気を抜かれる。

「アンタはいつまで経っても人の話を聞かないわよね。
長く生き過ぎて、耳が遠くなったのかしら。お婆ちゃん？」

紫の言う通り、私は丸くなったのだろうか。
昔ならば確かに、戦闘中に私から話しかけたりすることはなかった。

長い歳を生きてきたから？
それともあの娘が来てから？
良く分からない。

「フフッ、相変わらずね幽香。
本当ならここで一献傾けて、昔話に花を咲かせたいところなんだけれど。
色々とお忙しいみたいだし、ひとつゲームをしましょう。
もし貴方が勝ったら、邪魔はしないと約束するわ」

魔理沙とはもうやったんでしょう？　と付け足してくる。

ゲーム？　なんでここでゲーム？
ま、まるで意味が分からない。
全然理解できない。だって殺し合いの最中なのに。
というより、何で私がゲームで負けたことを知っているのだ。

「な、ななんでそこでゲームが出てくるのよ。
二度と私はやらないわよあんなもの！
それに今は殺り合ってる最中じゃないの！！」

私には似合わないのよ、あんな安っぽい遊びは。
もっと高級で優雅なものじゃないと。
というかチャンスだ。
今下僕を呼び出せば、
確実にグチャグチャのヌチョヌチョに。
お子様立ち入り禁止のシーンを展開してやることが出来る。

「あらあら。負けるのが怖いのゆうかりん？

少し見ない間に腰抜けになってしまって、私は悲しいわ。
臆病者のことなんかどうなろうが知らない。
起きたことをありのままに、美咲ちゃんに伝えるとしましょう」

これでもかというほど面白可笑しくね！　と嬉しそうに微笑む若作りババァ。
扇子で扇ぎながら余裕の表情。
つい殴りたくなるような、実に憎たらしい顔をしている。

それはともかく。

「――ちょ、ちょっと待ちなさい」

「嫌よ。私は待つのが嫌いなのよ。まだまだ若いからね。
のんびり立ち止まってなんかいられないわ。
さて、早速貴方の娘のところに向かうとしようかしら」

こ、この糞野郎ッ！
どうせあることないこと、娘に吹き込むに違いないのだ。
性格が捻くれているこの糞女は確実にやる。間違いない。
昔からそうだ。
私が人妖総合友好度最低ランキングＮＯ．１（文々。新聞調べ）に輝いたのも、
半分以上はこいつのせいなのだ。後は天狗の捏造だ。
しかも１０年連続って。明らかに組織票が加わっている。

紫が何を言おうが娘は信じない。多分信じないと思う。
でももしかしたら信じちゃうかもしれない。
心が素直で純真だから。

……。
これは挑発に乗るんじゃない。敢えて乗って上げるのよ。
私は常に冷静。冷静なのよ。
大きく深呼吸して、心安らかに。
すーはーすーはー。
よし、大丈夫。もう何も怖くない。

「わ、分かったわよ。やってあげようじゃない。
私が臆病だなんて、ホラ話を吹かれるのもアレだしね。
それで何で勝負するのかしら。変なのは嫌よ」

「実はね、相手をするのは私じゃないの。
貴方とどうしても遊びたいって子がいてね。
今呼ぶから、その子と仲良く遊んであげて頂戴な。
私はここで審判役を務めてあげるから」

扇子を閉じ、空中に向かって合図を送る紫。
同時に重々しい口調で呟き始める。

「……古代中国において、あまりの過酷さ故に
時の皇帝が禁止したとも伝えられる呪われた遊び。
死合いの後には、死屍累々の光景が広がったと言う」

上空に巨大な隙間が現れ、一人の伝説の妖怪が颯爽と荒野に降り立つ。
……というか、私の可愛い食虫植物の上にドスンと落ちてきた。
グギャーという絶叫と共に、下僕は昏倒してしまった。
あれでは再起不能だ。可哀想だが、冥福を祈ろう。

伝説の妖怪、『伊吹萃香』は腰に手を当て、不敵な笑みを私に向け

る。

「――その名も、超リアルな鬼ごっこさ！」

どうだ！　といった顔で勝ち誇る伊吹萃香。
きっと上手い事をいったつもりなのだろう。
紫は生暖かい視線を注いでいる。
またこいつの仕業か。

「……」

一陣の風が、荒野を吹き抜けていった。
突っ込むものは誰もいない。

・人妖総合友好度最低ランキング
人間、妖怪にアンケートをとり、
幻想郷で最も恐れられる人物を選出する。

・八雲紫
境界を操る程度の能力

・マダツボミ

こうおん　たしつの　とちを　このむ。
ツルを　のばして　えものを　とらえる　ときの　うごきは　とても　すばやい。

第九話　本当は怖い、まだ蕾（後書き）

モンジャラ的な触手ＶＳマダツボミさん。

第十話　二人の鬼

「やぁやぁ幽香。会うのは賽の河原以来だね。
あそこでは中々面白い物を見せてもらったよ」

食虫植物の成れの果てからヒョイと飛び降り、プププと笑う子鬼。

「あれはこのスキマが無理やり見せた悪夢のはずよ。
なぜ貴方がそれを知っているのかしら」

他人の夢を覗くなんて、出来るわけがない。
多分。いくら隙間でも夢の世界を開くなんて。

「なぁに。少しだけだけあんたの『地獄』とやらにお邪魔しただけさ。
それに、どこまでが夢かなんてどうでもいいじゃないか。
人生なんて『胡蝶の夢』みたいなもんさ。なんてね」

我ながら上手いことを言う、と満足そうに頷いてガブガブと酒を呑む。
酒の臭いがここまで漂い始めている。

萃香は更に続ける。

「――それに今起きていることも夢かもしれない。
本当のあんたはまだ寝ているのかも。それとも無間地獄に落ちたのか。

はてさて、どうだろうね」

「馬鹿も休み休み言いなさい。鬼の寝言など聞きたくないわ。
それより早く勝負の内容を教えなさい。
夏らしく、『西瓜割り』なんかどうかしら。
もちろん西瓜役は貴方よ」

思い切り日傘でぶん殴ってやろう。
赤い飛沫が飛び散るくらいに。
鬼は中々しぶといから、本気でやっても『多分』大丈夫だろう。

「くふふ。まぁまぁそう慌てなさんな。
そんなに急いだりしたら、鬼が笑うよ」

「……鬼は貴方でしょうに。超リアルな鬼ごっこですって？
ここで仲良く追いかけっこでもするつもりかしら。馬鹿馬鹿しい」

本当に馬鹿馬鹿しい。そういうのは妖精達とやっていれば良いのだ。
。
脳内お花畑で好きなだけ飛び回っていれば良い。

「んー簡単に言うとそうだね。ただし鬼はあんただよ。
逃げる私をガッチリと捕まえればあんたの勝ち。触れただけじゃ駄目だ。
力尽きて、あんたが諦めれば私の勝ちさ。勿論反撃はするよ」

「・・・・・・なんで私が鬼をやるのよ。全然意味が分からない。
鬼ごっこなら、貴方が鬼役を務めるべきでしょう」

酒の飲みすぎで、思考が停止しているのではないだろうか。

やはり酔っ払いなど相手にするのではなかった。
「いやいや。これからあんたは『鬼』になるよ。
間違いない。私は嘘をつかないんだ」
そう言うと、萃香は紫に横目で合図を送る。
それに答えるように指を鳴らすと、新たに隙間を展開する。
隙間はまるで水面のように、波打っている。
どうやら特殊な隙間のようだ。
しばらくすると、その水面は『映像』を写し始める。
そこに映っていたのは私の娘。
魔理沙とお茶を飲んでいる美咲の姿があった。
「み、美咲？」
「――そうあんたの愛する娘だよ。
賭けるものはそれだ。人攫いは鬼の本分。それが妖怪だろうが関係ない。
泣き叫び、悲嘆にくれるあんたを肴にして飲む酒は、さぞかし美味だろうねぇ。
想像しただけで涎が出てくるよ」
挑発するように私に笑いかけてくる鬼。
私は殺意を露にして警告する。
「あの娘に手を出したら、本気で殺すわよ」
「いいねぇ、ゾクゾクしてきたよ。あんたときたら私が喧嘩を申し込んでも、

まるで相手にしてくれないからね。だからこうして一芝居打ってみたってわけさ。
鬼は嘘をつかない。お前が諦めたら必ず攫う」

「フフフ、素敵ねぇ。娘を助けるために鬼と鬼が勝負するなんて。萃香じゃないけど、私も年甲斐もなくドキドキしてきちゃったわ」

扇子で煽ぎながら、高みの見物を決め込む隙間妖怪。
私は横目でジロリと睨む。

「攫ったらどうしようかね。じっくりと甚振りながら、喰ってやろうか。
まだまだ幼くて、実に柔らかそうだ。さぞかし美味いだろうね・・・・・・っと！」

戯言を言い切らせる前に距離を詰め、日傘を上段から振り下ろす。
最早我慢の限界。頭を豪快に叩き割ってやるつもりで、全力で攻撃する。

鬼は左腕でそれを弾き返すと、右でカウンターの拳を入れてくる。
轟っと唸りをあげる鉄拳。まともに食らったら致命傷を負いかねない威力だろう。
私はすんでのところで回避し、渾身の力を込めた突きを放つ！

「――ッ！　流石にやるねぇ。
面白くなってきた。こうでなくちゃ」

腹部に直撃させ、吹っ飛ばすことに成功したが、
まるで堪えた様子が見えない。流石は鬼といったところか。

「死になさい」

傘を鬼に向け、抜き打ちで妖気弾を連射する。
いつもの手加減した弾幕ではない。殺すつもりで放ったものだ。
鬼は避けようともせず、片腕でそれらを弾き飛ばした。

「最初はさ、本当に軽く追いかけっこでもするつもりだったんだよ。
でも気が変わった。弾幕ごっこもあれはあれで面白いが――」

そう言って一息付くと、両拳をバンっと叩き付ける鬼。
打ち付けた拍子に大気が振動するのを感じる。

「単純な殴り合いも私は好きだね。実に分かりやすい！
特にあんたみたいに、本気で殺しに来る相手が一番楽しいよ！！」

「そんなに単純だから、毎回人間にしてやられるのよ。
大江山の出来事をもう忘れたのかしら？
恥を知ったら、他の鬼みたいに地底に引き篭もっていなさい」

会話を交わしつつ、少しだけ右後方に移動する。
そう少しだけ。
私の狙いを悟られないように。

「私はあいつらみたいに、ウジウジしているのが大嫌いなんだ。
こうやって好き勝手に暴れまわることこそ、妖怪の本分って奴じゃないか。
さぁ、もうお喋りはお仕舞いだ。楽しい喧嘩を再開しようじゃないか！」

ブンブンと拳を回し、私目掛けて、直線に突進してくる馬鹿鬼。
既に、最初に自分で言ったルールを忘れているらしい。

フフッ。思わず笑みがこぼれそうになる。
全て私の計算通り。

「掛かったわね。必ず直線上に突っ込んでくると思っていたわよ。
馬鹿がつくほど分かりやすいからね。貴方たち鬼というのは」

日傘を勢い良く地面に突き刺し、一斉に下僕を呼び出す。

「ぬおっ！　なんだこいつら！」

「私の可愛い下僕よ。素敵でしょう？」

現れたのは紫戦において、地中に展開しておいた食虫植物3体だ。
こんなこともあろうかと、密かに移動させておいたのだ。
後は私が位置を微調整すれば下準備は完璧。
幻想郷の今孔明を名乗れるかも知れない。

……と、いうわけで哀れな子鬼は、食虫植物の蔓によってグルグル
巻きにされている。
3体による拘束なので、それはもうすごいことに。
まだ胃液は掛けていない。

「うぐっっ！　なんだこれ千切れないぞ！
たかが植物の蔓如き、真なる鬼の力をもってすればっ」
『我が左手に封じられし鬼よ、今こそその力を示せ！』
と意味不明な叫び声を上げるが、実に無駄無駄無駄無駄。
「無駄よ。力だけでは簡単には引き千切れないわよ。
頭を使わないとね。頭を」
勝利を確信した私は、グルグル状態の子鬼の方へ近づく。
手も足も出ないとはこのような事をいうのだろう。
実に愉快な気分である。
「馬鹿を言いなさんな。私が本気をだせばこんなもの……こんなものッ！
って、おかしいな。なんだか力が入らないぞ。
それになんだい、このヘンテコリンな粉みたいなのは」
顔が濡れてしまって力がでないよ的な、情けない表情を浮かべる子鬼。
残念ながら、新しい顔は届かない。残念。
「勿論、さっきから強力な痺れ粉を撒いているのよ。
鬼には効きにくいと思って、貴方は特別にいつもの3倍。
心配しなくても大丈夫。『多分』命には関わらないわ。
……さぁ『鬼さん捕まえた』わよ。これでゲームはお仕舞いね」
鬼の頭を力強く掴む。普通の人間ならば、頭部が粉砕できるぐらいの力で。

「そ、そんな汚いぞ！　こんな不完全燃焼じゃ全然納得行かないよ。
まだ始まって１０分も経っていないじゃないか！
おい紫、もう一度仕切りなおすから助けておくれよ。
って、既にいねぇえええええ！」

出口らしき隙間を開いたまま、怪異ムラサキババァは姿を消していた。
相変わらず勘の良い女だ。

「……ところで、貴方さっき、面白いことをほざいてくれてたわよね。
なんだったかしら。良く思い出せないのだけれど。
誰を貪り喰らうって？」

ポンポンと子鬼の頭を軽く叩いた後、ゆっくりと撫でてあげる。
ありったけの力を込めて。

「ハ、アハハハ。冗談に決まってるじゃないか。
ちょ、ちょっと盛り上がるように、演じてみせただけだよ。
嘘じゃなくて、お芝居ってやつさ！」

引っ掛かったねハハハ、と引き攣った笑みを漏らす子鬼。

「あらあらそうなの。迫真の演技で思わず信じてしまったわ。
幻想郷一の役者ねぇ。騙されちゃうところだったわ」

両手で萃香の顔を、優しく包みこむように撫で回してあげる。
ふふふ。

「そ、そうだろう？　だから早く開放しておくれよ。
急いでいるんだろうし、こんなことしてる場合じゃないはずだよ。
私に構わず行っておくれよ」

「……あの悪夢から目覚めたときね。貴方を必ず泣かすと誓ったのよ。
賽の河原では随分と好き勝手やってくれて、どうもありがとう。
私はね、言った事は必ず守るようにしているの。
だから、ゆっくりと時間を掛けて苛めてあげるわね」

そう宣告し、両手で子鬼の柔らかそうな頬を思いっきり引っ張る。
ぐいーっと、それはもうものすごい勢いで。
萃香の頬は餅のように伸びていく。

「い、痛てててててっ！！　何するんだ！
この鬼ッ！　悪魔ッ！」

少しだけ涙をこぼしている可哀想な子鬼。
本当に可哀想で心が痛んでしまうわ。フフフッ。
ダメよ幽香。笑ったりしてはいけないわ。
これは躾なのだから。

「まだまだ元気が有り余ってそうね。
次は拳骨とデコピン１００発のフルコースよ。
楽しみにしていなさい」

悪い子にはきちんと、骨身に染み入るまで、
トラウマになるくらいのお仕置きをしなければいけないわ。
こういう悪ガキは、もう嫌というほど分からせてやらないと駄目だ。

「わ、私のそばに近寄るなあぁーーーーーーッ！！」

「だがお断りよ。ごめんなさいね？」

第十一話　白黒と七色と見習い娘

・アリス・マーガトロイド邸

「どうだ美咲。なかなかイケるだろうこの紅茶。
味にうるさい奴も黙ると評判なんだぜ」

コーヒーやお茶も良いが、紅茶もいける。
美味けりゃ何でもＯＫが私のポリシーだ。
ソファーに腰掛け、優雅に香りを楽しむ。
お茶請けのクッキーも中々美味い。
恐らく手作りだろう。この完璧超人め。

「なぜ貴方が威張っているのか、意味がわからないのだけど。
特に用が無いなら、それを飲んでさっさと帰って頂戴」

まるで興味なさそうに、本に目を落とすアリス・マーガトロイド。
人形と魔法だけが友達の凄い奴だ。
私もちょっとぐらいは友達のつもりだけれども。

「相変わらず愛想がないなぁ。自称都会派魔法使いさんは」

「でも本当に美味しいです。アリス・マーガトロイドさん」

舌を噛みそうになりながら、アリスを褒める美咲。
……パチュリー・ノーレッジも噛みそうな名前だな。

「……アリスでいいわよ。褒めてもらって、悪い気はしないわ。
さぁクッキーも遠慮せずに食べなさい」
空になったカップに、人形を操作して注ぎ足す。
本当に器用なもんだ。まさに職人芸だ。
……華麗に自爆させたりもするけど。

「お前も子供には甘いんだな。新しい一面を発見した気分だぜ」

「貴方も十分に子供だから心配いらないわ。
はい、キャンディーをあげましょう」
私の手をとり、反応する前にキャンディーを握らせてくる。
つい受け取ってしまい、顔が真っ赤になる。

「いらん！　私は子供じゃないからな。ほれ美咲、有難く受け取れ」
自分の分と合わせて美咲にポイっと渡す。

「ありがとうございます。魔理沙さん」

包みを開けて、口に頬張る。可愛いやつめ。
ツンツンとほっぺをつついてみる。
眉を顰めるが、なすがままだ。

「相変わらず堅苦しいなぁ。同じ釜の飯を食べて、
一緒に風呂に入って、同衾した仲なのに。
そこは親に似ず生真面目なのかな」

「……貴方、やっぱりそういう趣味があったのね。

しかもこんな年下相手に。まさに外道ね。
これ以上罪を重ねる前に、私が楽にしてあげるわ」

ジロリと氷のような視線を向けてくる、七色馬鹿。
包丁を持った人形が、ゆらりゆらりと近づいてくる。
呪いの市松人形みたいに、髪がヤバイことになってる。
夜見たら悲鳴を上げること間違いなしだ。

「何を盛大に勘違いしているかは知らんが、程々にしておけ。
子供が見ているぞ」

「――冗談よ」

人形が再びポットに持ち返る。
未だ凶器を隠し持っているところが恐ろしい。
しかも髪が戻っていない。

「お前の冗談は笑えないんだ」

「それは御免なさいね」

「……お二人は本当に仲が良いんですね。見ていて全然飽きません。
これが腐れ縁ってやつなんですね。母様が言っていました」

「貴方、大人しそうな顔して結構言うわね。
母親似かしら」

「ああ、こいつはこう見えて熱血娘だぞ。
何しろ、親を超えるために修行を申し出るくらいだからな。
魔女になる素質はばっちりだぜ。妖怪だけど」

「それでお古の魔女服を着せてあげたのね。
ウフフ、可愛いところあるじゃない」

「う、うるさいな。その笑い方はやめろ」

誰にでも触れられたくない過去はある。
いわゆる黒歴史というやつだ。

「まぁいいわ。それで結局何の用なの。
愛弟子を連れての挨拶周りかしら？」

「まぁそれもあるんだけどな。
お前の人形捌きは見ているだけでも楽しいからな。
美咲にゆっくり見せてやりたかったのさ」

ふと横を見ると上海人形を抱いて、ソファーでうたた寝をしている
魔女っ娘。
今日は朝から座学に、弾幕実習、きのこ栽培とハードだったしな。
子供にはちょっときつかったか。

気が付くと、アリスが真剣な目をしてこちらを見詰めていた。

「……・ひとつ質問して良いかしら。
なぜこの子を弟子にとったの。
貴方、自分の修行で一杯一杯だったじゃない。
それとも今後の成長に見切りをつけたの？」

「いや、私は常に目標に向かって邁進している。
今も昔もこれからも変わることはない。

……ただ」

「ただ？」

「なぁにそんな複雑な話じゃない。
ちょっと前、私が幽香と弾幕ごっこで勝負してる時、
こいつと目が合っただけさ。そんときは誰かは分からなかったし
すぐに幽香の奴に吹っ飛ばされたからな」

あいつ、いきなり取り乱したかと思ったらマスパ連続でぶっ放しやがって。
相当娘を見られたくなかったらしい。
どこまで箱入りにするつもりだったのやら。

「目が合っただけで、貴方は弟子にとるの？」

「違う。　弾幕で闘ってる私達を羨ましそうな顔で、
食入るように見てたから印象に残っただけだ」

その時は、本当にただそれだけだった。

霊夢に呼び出されて、直接話を聞いて。一生懸命頼み込む姿を見て。
魔法に焦がれて家を飛び出した、私とどこか似ていると感じてしまった。
まぁ立場は全然違うけれど。
同情が無かったとも言わないし、余計なお世話だとも自覚している。

「そう。まぁいいわ。やるからにはちゃんと教えてあげなさいよ。
途中で投げ出す程、性質の悪い物はないわ」

「へいへい。分かりましたよ、アリス先生」
優しいんだか冷たいんだか、相変わらず良くわからん奴だ。
無関心を装う癖に、意外に首を突っ込んでくる。

「返事は一回よ、魔理沙先生。
さぁそろそろ良い時間だし、晩御飯にしましょう。
今日は二人とも食べていくと良いわ。
新鮮な野菜も貰ったことだし、腕によりをかけて作るから」
手をパンと叩き、人形を引き連れて台所に向かうアリス。
私も美咲を起こすとしよう。
中途半端に寝てしまうと、夜寝付けなくなるからな。

――――――――――――――――――――――――――――

今日はいつにも増して、豪勢で本当に美味しかったな。
アリスの奴、良い主婦になるなきっと。
「さぁ美咲。そろそろ帰るとするか。
ちゃんとアリスにお礼するんだぞ。教えた通りにな」
横目で合図を送ると、少し躊躇した様子を見せる。
「は、はい。魔理沙さん」

「そんなに、かしこまらなくても良いのよ。
遠慮せず、子供らしく振舞いなさい」
苦笑しながら美咲の頭を撫でているアリス。
実はこいつは子供好きなのだ。
人里で子供相手に人形劇をやったりしているし。
口にしたら全力で否定するだろうが。
こいつは間違いなく、子供の世話を焼くのが好きなタイプだ。

「今日はありがとううございました。……あ、アリスお姉さま」
ピシッと笑顔のままアリスが固まる。
「……魔理沙に言われたのね？
大人をからかってはいけないわよ
あと、コイツの言うことは疑ってかかりなさい」
「とか言いながら顔がニヤついてるじゃないか。
アリスお姉さま？」
ケケケと意地悪く笑ってやる。
いつもの仕返しだぜ。
「う、うるさいわね。私は貴方みたいに捻くれていないのよ。
それよりも、ちょっとだけ抱かせてもらっても良いかしら」

ヒョイと、美咲を抱えあげようとするアリスを全力で止める。

「アリスお姉さま？」

「お前は何を考えているんだ。
少し冷静になれ」

「そ、そうね。私は都会派ですものね」

「それは全然関係ないぞ。
まぁいい。私達は帰るからなアリス。
また遊んでやってくれ」

「ええ、気が向いたらね。
2人とも気をつけて帰りなさい。もう外は暗いから」

アリス邸を出て、美咲を箒に乗せて飛び上がる。
私が抱きかかえる態勢だ。
ふふ、本当に妹が出来たみたいだ。
いつか私も姉さんと呼んでもらおうかな。

おっと、下らないことを考えてる場合じゃない。
星空を全速力でかっ飛ばして帰るとしよう。
寝る子は育つってね！

・アリス・マーガトロイド
人形を扱う程度の能力

第十二話　紅白黒と鬼と見習い娘

・博麗神社

「いやー今日も暑いなぁ。っていうかマジ暑い。
霊夢、冷たいお茶をくれ。私は麦茶でいい」

胸元をパタパタやりながら手で汗を拭う。
本当に暑い。今弾幕ごっこなんかやったら死ぬ。

美咲も暑そうだ。流石に黒い魔女服はこの灼熱地獄ではキツい。
今度夏服ｖｅｒも作ってやらなければ。
アリスにお願いして。
持つべきものは友人だ。

「寝言は寝てから言いなさい。
というか、たまにはお賽銭でも入れてみたらどうなの。
もしくはお土産を持ってきたりね。主に食べ物とか」

縁側に突っ伏して寝言を吐く紅白巫女。
腋が出ているくせに、暑さには弱いらしい。
懐はいつも寒いくせに。

「それはこの前、美咲が渡していたじゃないか。
まだ残っているんだろう？」

「半分は塩漬けにしたわ。あれは保存食よ。
備えあれば憂いなしってやつね」

なんという悲しい性だ、思わず涙が出る。
それでも賽銭は入れないが。全くご利益が無さそうだし。
逆に金運が落ちそうである。
貧乏神的な意味で。

「良ければ作物を育てませんか？
美味しい物が食べ放題ですよ。
色々と手間はかかりますけど」

晴耕雨読、良い言葉だ。
霊夢に似合わないことこの上ない。

「嫌よ。面倒くさそうだし。
持ってきてくれるのは、いつでも大歓迎だけど」

……本当に駄目な女である。

しかし、こんな体たらくでありながら、異変となるとガラリと変わるのだ。
訳の分からない鋭い勘と、鬼のような戦闘能力を発揮する。
スペルカードルールの考案者にして、妖怪退治の専門家。
まさに楽園を守る素敵な巫女って奴だ。
そして、私の打ち倒すべき目標である。

ちょっと褒めすぎたな。やっぱり腋巫女で十分だ。

「なんだいなんだい、若い連中が昼間っから情けないねぇ。
もっと元気に、清清しく生きてみたらどうだい。
人生カラッと爽やかに行かないとね！」

奥から酒瓶を持ってフラフラと現れる角つき少女。
いつもと変わらず、朝から酒に溺れているようだ。
本人が言うには、酒は飲んでも呑まれたことはないらしい。

「朝っぱらから、酒を飲んでる奴に言われたくないぜ。
……ああ、それにしても暑いな。頭が茹だってくる」

滴り落ちる汗を拭う。
身動きしていないのに、熱が篭ってくる。
ああ、チルノでもいれば良いのに。

「ふふん。この伊吹の萃香様が良いものを持ってきてあげたのに、
そんな態度で良いのかな」

勿体つける小鬼。

「良いもの？　なんだそりゃ」

私の言葉に、笑みを漏らすと指を鳴らす。
奥から球体状の物がコロコロと転がってきた。
妖力で動かしているのだろうか。

「ジャジャーン。夏の定番にして、果物の王様の『西瓜』だよ！
ほらほら、大きいだろう！」

緑の球体を両手で、自慢気に掲げる萃香。

なんとかの伝説みたいなポーズだ。
実にお子様っぽい。

「それはアンタのじゃなくて、私の西瓜でしょ。
後で食べようと思って、水につけて冷やしておいたのよ」

倒れ伏したまま、腕だけ上げて自分のものだとアピールする。
だらけるのもここまで来ると尊敬に値する。

「しかし持ってきたのは美咲だろう。
という訳で、皆で仲良く頂くとしよう。
人間、譲り合いの精神が重要だぜ」

「まぁ良いけど。勿論私も食べるからね！
全部食べたら殺すわよ」

紅白の餓鬼が何か言っているが、無視をする。

「霊夢ーこれ割っていいかい？　この伊吹萃香が西瓜を割るんだ。
まさに西瓜割りだ。　ワハハハ！」

……夏だってのに、一瞬冷気が吹き抜けたぜ。
おそらく何万回と言ってきたんだろうなぁ。
このダジャレ。
そしてこれからも記録を伸ばしていくのだろう。
思わず目頭が熱くなる。色々な意味で。

「何言ってんのよ。割ったりしたら中身が落ちちゃうじゃない！
ちゃんと切らなきゃ駄目よ！
当たり前だけど、私が一番大きいやつよ」

ツッコミをいれずに、大きさを指示している。
まさにボケ殺し。

「ではこれ切ってきますね。
台所をお借りします」

西瓜を持ってヒョコヒョコと台所に向かっていく美咲。
実に躾がなっている。

「うーん。意外に働き者ねぇ。
私の所で預かれば良かったか。
それに畑も作ってくれそうだし」

ようやく起き上がると、大きく伸びをしつつ、美咲の背中を見送る
霊夢。

「ふふ、もう手遅れだぜ。
あいつはこの魔理沙さんがちゃんと面倒みるからな。
お前はそこでブーたれてな」

萃香も興味津々といった表情で後姿を見つめている。

「あの花の大妖の娘なんだって？
そのまま、小さくしたような感じじゃないか。
実に興味深いねぇ。ちょっと攫ってみようかな。
あいつ全然相手にしてくれなくてさー」

くふふと洒落にならないことを言う。

酒が相当回ってるな。
「やめとけやめとけ。
とっても怖い母親が常に目を光らせてるからな。
……今は強制的に眠ってもらってるが」

「……アンタのほうが、立場危ないんじゃない？
目覚めたら、物凄い勢いですっ飛んでくるわよ。
私は関知しないから巻き込まないでね」

「本当にヤバそうなら、一目散で神社に避難するからな。
まさに異変ってやつだ。おーこわいこわい」

「人の話を少しは聞きなさいよ。
まぁ美咲に説得してもらえば大丈夫よ。勘だけど」

まるで他人事だが、必ず巻き込んでやるつもりだ。
困ったときの巫女頼み。

と、そんな事を話していたら、美咲が西瓜をもって現れた。

「お待たせしました。
霊夢さんが一番大きくなるように切ってきました」

「確かに、私のが一番大きいわ。
これなら文句ないわ」

「どこまでも卑しいんだお前は。
悲しくなるからやめてくれ」

「うるさいわね」

「魔理沙さんもどうぞ」

切り分けられた西瓜を順番に渡していく。
うーむ、冷えてて実に美味そうだ。
西瓜はスプーンなんか使っちゃダメだぜ。
やはりかぶりついて食べないとな。

「ごちそうさまでした」

行儀良く手を合わせる美咲。
本当に礼儀正しい奴だ。

「はい、お粗末様」

何故か威張っている巫女様。

「お前が何かしたわけじゃないけどな」

「アンタだって同じじゃない。
あーお腹が膨れたら、なんだかまた眠くなってきたわ」

バタッと座布団を枕に、倒れるだらけ巫女。

食ったら寝る。駄目人間の見本である。

――と、突然何もない空間から声が響いてくる。

「ハァイ。皆さんお揃いかしら？

――あらあら。ちょっと来るのが遅かったみたいね。

ご相伴に預かれなくて残念だわ」

神出鬼没の隙間妖怪まで現れた。

相変わらずの混沌空間だぜ、この神社は。

「なんだ紫か。美味しいお酒でも持ってきてくれたのかい」

瓢箪を掲げて、挨拶する鬼。

「違うわよ。ちょっと悲しいお知らせを持ってきたの。

……魔理沙、貴方幽香に『胡蝶夢丸』を飲ませるように仕組んだでしょう」

扇子で口を隠し、伏目がちになる紫。

きっと碌でもない知らせだ。主にこいつが何かやらかした系の。

被害を受けるのは、今回はどうやら私らしい。

「あ、ああ。メディスンに頼んでちょっとな。

で、なんでお前がそれを知っているんだ」

「……ちょっとした手違いですり替わっちゃったのよ。

『胡蝶夢丸ナイトメア』と」

「お、おい！　どういう手違いでそんな話になるんだよ！
そんなもん飲ませたら、寝起き最悪確定じゃないか！」
目を爛々と光らせて、両手をだらんと前に垂らし、
どこまでもどこまでも追いかけてくる花妖怪。
きっと家のドアをドンドン！　と一晩中叩き続けるんだ。
ノックが止んで、そっとドアを開けるとそこには。
ホラーなんか目じゃない。まさに惨劇だ。
キリサメがなく頃に。冗談じゃないぜ。

「まぁ済んでしまった事はどうでもいいじゃない。
私も色々と忙しいのよ。という訳で今日はお暇するわね」
言うだけいって隙間に潜り込む紫。
私の文句は聞く気がないようだ。

「そこの可愛いお嬢さんとは、また今度お話させてもらうわ。
萃香は私と一緒に来て頂戴。面白いものが見れるわよ。
――それでは皆様、御機嫌よう」
萃香の手を強制的に掴んで引きずりこむと、連れ立って亜空間に消えていく。

「魔理沙さん、胡蝶夢丸ってなんですか？」
私の袖を引っ張る美咲。
「一粒飲んでぐっすり寝ると、最高にハイになれる魔法の薬だぜ。

別に危ないもんじゃないから心配いらないぞ」

「そうなんですか。今度良かったら、私にも飲ませてください」

「ああ、機会があったらな」

あれは高級品だから難しいかもなとも釘を刺しておく。
子供が飲むものではない。

しかし、まずいことになった。
胡蝶夢丸は確かに、良い夢を見れる。
……ただナイトメアはやばいだろう。
試したことなど勿論ないが。
自分から悪夢を見よう、なんて物好きいるわけがない。
製作者の腹黒い性格が良く現れてるぜ。
絶対嫌がらせの為に作ったはずだ。

「しかしまずいな。良い夢を見て、機嫌が良くなってる時にちゃんと美咲の件の許可を取ろうと思ったんだが」

思わず腕を組んで唸ってしまう。
うーむどうしたものか。

「小手先の策を弄するからよ。
正攻法でいきなさい、正攻法で。
そのほうが楽よ」

だらけ巫女が何か言っているが気にしない。

「まぁちょっと対策を考えるとするか。
美咲、お前にも手伝ってもらうぜ。
頑固な母ちゃんを説得するんだ」

「きちんとお願いすれば分かってくれます。
母様は優しいですから」

「そうかそうか。じゃあ惚気も聞いたし、今日は帰るとするか。
困ったらまたここにくるとしよう」

「厄介ごとは一切お断りよ。
後、今度はお土産を持ってくるように」

転がりながら、手をひらひらとする霊夢。

今日はそれぞれ箒に乗って、家路に着く。
飛行練習も大事な授業の１つだ。
いつかは幻想郷最速師弟を目指したいものだ。

それにしても如何するかな。
紫の奴が余計なことをしたせいで、話が滅茶苦茶だ。
ちょっとした冗談だったということにして、笑って誤魔化してしまおうか。
……あいつが笑って誤魔化されるようなタマだろうか。
どちらかというと、ケタケタ哂って襲い掛かってきそうだぜ。
い、一杯飲んで、灰色の脳細胞で考えることにしよう。

第十三話　幽香ＶＳ幻想郷四天王

・やみのなかにいる

漆黒の暗闇の中。
ワイングラスを片手に、四天王の一人が話し始める。
「ククク。『鬼』の伊吹萃香がやられたようね！」
「アレは我等の中でも最弱。
たかが花妖怪にやられるとは、四天王の面汚しよ」
『歌』を司る妖怪がグラスを指で弾いて鳴らす。
「でも萃香をいれたら5人だよね。
5人なのに四天王っておかしくないかな」
「ルーミア、それは言っちゃダメだよ。
後、意味もなく闇を展開しないで。本当に暗いから。
それとチルノにミスティア。
そのワイングラスとマントは一体何なの？」
リグルが呆れ顔で突っ込みを入れる。
この面子の中では比較的常識を持つ妖怪に入るので、
望まなくてもその役割は回ってくるのだ。
ルーミアは天然なので、少し荷が重い。

「何って。魔理沙が最強たるものは常に『いげん』を持てって。
いげんって何か良く分かんないけど」

ミスティアの真似をしてグラスをチンと鳴らし、一気に飲んで空にする。
中身は勿論葡萄ジュースである。

「暗いほうが雰囲気でるでしょ。
リグルは侘び寂びを理解しないと駄目だよ」

お前は理解しているのかと、リグルは反論しそうになるが堪える。

「……まぁそれは良いんだけど。それより本当にやるの？
幽香は本当に強くて怖いよ。昔酷い目にあったんだから」

ブルブル震えだすリグル。
昔のトラウマを思い出してしまったらしい。
死なない程度に散々痛めつけられ、恐怖を植え付けられたのだ。

「そのために一杯練習したじゃない。『アレ』が決まれば
絶対に勝てるよ！」

高らかに宣言するミスティア。
まるで歌声のように辺りに響き渡る。

「そ、そうだよね。私達４人が力を合わせれば敵はないよね！
ゴメンみんな。なんだか嫌な予感がしたけれど、気のせいだったよ」

その声に、無理やり気力を奮い立たせるリグル。
チルノがもっと元気がでるようにと、特製マントを被せる。

背中には髑髏マークに蓮の花。外の世界では『かぶき者』が着ける由緒あるマークだそうだ。
かぶき者がなんなのかは、チルノは勿論理解していない。

陽が落ち始めてきた空を、チルノ達は思わず見あげる。
7つ星の脇に、赤くピカピカ輝く綺麗な星が見えた。

「みんな空を見てよ！　お星様もあたい達を応援しているよ！
あれがいわゆる勝ち星ってやつね！
もはや勝ったも同然ね！」

チルノが得意気に星を指差す。
おおーと皆が目を輝かせるが、ルーミアだけがなぜか青ざめていた。
ダラダラと脂汗のようなものが流れ始める。
赤い星を見つめたまま、微動だにしない。
不審に思ったリグルが声を掛けようとしたところ、
ゴシップ好きのうるさい天狗がバタバタとやってきた。

「みなさーん準備はいいですか？　幽香さんがこっちに向かって来ていますよ。
機嫌は見る限り最悪ですから、死なない程度に頑張ってくださいね！」

「まかせなさいよ！　あたいの最強伝説をそこで見届けなさい！」

「期待してますよチルノさん」

親指をビッと上げ、高度を取って撮影準備に入る天狗の射命丸。

「良い？　みんな。
この勝利が幻想郷中に広まれば、あたい達の『最強の座』が、
かっこたるものになると言うわけよ！
絶対に勝つよ！　あたい達の勝利に乾杯！！」

「乾杯！」

４人で視線を交わし合い頷くと、グラスを勢い良く地面に叩きつける。
グラスは粉々に砕け散り、液体が大地へと染み込んでいく。
リグルはそのグラスが、まるで己の運命を暗示しているように思えたが、
敢えて言葉には出さなかった。

マントを華麗に翻すと、各々が夕闇を切り裂いて飛んでいく。
射命丸は意気込んで飛び去っていく“３つ”の影を、暫くの間生暖かい視線で見守っていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「こんばんは元気な子供達。私は急いでいるのだけど、何か御用か

しら？」

ゆっくりと近づいてきた花の妖怪と相対するチルノ一行。
それを一瞥すると、一見優しそうな顔で微笑み語りかける幽香。
その言葉に、チルノは宣戦布告をもって応える。

「今日でアンタの最強伝説は終わり！
これからはあたい達みたいな、ナウでヤングの時代が始まるのよ。
アンタみたいな枯れたバァさんは用済みよ！！」

チルノが腰に手を当て、指をビシッとむける。
同時に幽香の額にビシッと青筋が浮かぶ。

「――フ、フフフ。良い覚悟ねチルノ。
リグル、まさか貴方まで私と闘うとか言い出さないでしょうね。
前調教したことは、まだ覚えているのでしょう？」

「お、脅かしても怖くないぞ！　今日は皆がいるからね。
あのときの屈辱、今こそ晴らす！」

リグルもマントを翻し、チルノ同様ビシッとポーズを決める。
その顔に最早怯えの表情はない。
幽香は愉しげに微笑むと、細い目で一人ずつ品定めを始める。

「あらそう。それじゃあ勝負してあげるから、
とっととかかってきなさい。
『不幸な事故』があっても知らないわよ？」

くいっくいっと手招きする幽香。

「あの風見幽香を打ち倒した、
最強の八目鰻屋台としてこれからは客引きするわ。
私の歌姫伝説はここから始まるの。
さぁさぁ鳥目にしてあげる！！」

スペルカードを颯爽と取り出し、鳳凰の構えをとるミスティア。
チルノは満足そうに頷くと、先程から黙りっぱなしの妖怪に振る。

「ルーミアも何かビシッと言ってやんなさい！　……っていない！？
あ、あれれ、なんで！！」

動揺して辺りを見回すが、影も形もない。

「最初からいなかったわよ。貴方、寝ぼけているの？」

「う、うう。あ、あたいの完璧な作戦が。
で、でも大丈夫！　３人でも勝てるわ！
――リグル、ミスティ！　幽香にアレを仕掛けるよ！」

「了解！！」

「……やれやれ。面倒なことになったわ。
これもあの隙間婆の仕業かしら」

溜息を吐くと、幽香は目を妖しげに光らせる。
同時にチルノ達は打ち合わせどおりに、四方へと散らばった。
牽制の弾幕をばら撒きつつ、積み重ねた練習通りに。

３人で乱雑に素早く飛び回り、通常弾をばら撒いて幽香を翻弄する。
動きが鈍いのが弱点と、人間の本に書いてあったのだ。
チルノは本が読めないので、リグルに調べてもらったのだが。
とにかく、撹乱戦法こそ最も効果的であると、チルノ達は考えた。
案の定、幽香を釘付けにすることに成功する。
ここまでは作戦通り。

ミスティアが夜雀『真夜中のコーラスマスター』を発動させ、視界を遮る。
さらにリグルが蠢符『ナイトバグストーム』で退路を塞ぐ。

そして、最後にチルノが大技を炸裂させる。

「喰らえ！　半径２０ｍぐらい、パーフェクトフリーズ！！」

（これは絶対に避けられない。作戦通り！
この最強合体攻撃に耐えられる妖怪なんているもんか！）

チルノが勝利を確信しつつ、氷の礫をこれでもかと連続で叩き込む。
リグルとミスティアも一拍遅れて妖弾を目標に連発する。
全妖力を籠めて、出し惜しみなしに打ち続ける。

「これでとどめ！！」

チルノが凍符『マイナスＫ』を宣言する。
巻き添えを避けるために、リグル、ミスティアはすかさず退避行動を取る。

幽香がいたと思われる辺りに、チルノの渾身のスペルが巻き起こる。
凄まじい破裂音と共に、煙と氷の欠片がキラキラと舞う。

「や、やったの！？」

「か、勝った？　あの風見幽香に勝った？」

リグルが叫ぶ。ミスティアもスペルを解除して、固唾を飲んで見守る。

「あったりまえじゃん。楽勝よ！　あたい達の勝利ね！！」

チルノが満面の笑みで、仲間達にVサインを送る。
リグル、ミスティアはしばし呆然としていたが、
お互いに頷きあうと、顔を綻ばせた。

その顔は、数秒後絶望に染まることになる。

「なかなかやる……と言いたい所だけど。
少しばかり、踏み込みが足りなかったようね。
残念だけど、全く効いてないわよ」
煙幕と水蒸気が晴れると、五体満足の風見幽香がいた。
いつも持ってる日傘を開いて防御したらしい。
チルノは驚愕の表情でそれを見つめる。

「な、ななんで効いてないのよ。傘でガードするなんて、そんなのズルい！」

「ズルい？　３対１で襲い掛かってくる方が卑怯じゃないかしら」

「――う、ううう。で、でもあたいはどうしても最強に！」

「手段を選ばずに勝ち取った称号に、どれだけの意味があるのやら。
それよりも、まだやるの？　今度はこちらから攻撃させてもらうわよ」

傘を畳んで、鈍色に光る凶器をチルノ達に向けてくる。
リグルとミスティアは完全に戦意を喪失しているようだ。
だが、チルノはまだ諦めきれない。
震える手を押さえて、スペルカードを取り出す。
最後の最後まで諦めない。
それが『最強』というものだ。

幽香はそれを意外そうに見つめる。
たかが妖精、泣き喚いて逃げ出すと予想していたのだ。
面白いといった感じで口元を歪めると、魔力の充填を開始する。
本気を出すつもりはないが、軽く遊んでやる気になったのだ。

チルノが覚悟を決めて、スペルを宣言しようとした瞬間、
空気の読めない紅白が降りてきた。

「はいはいはいはい。そこまでよ悪戯妖怪ども。
こんなものは、弾幕ごっことして認められないわ。
どうしてもやりたいなら1対1で仕切り直しなさい」

別にタイマンでなければならないというルールはないが、
博麗霊夢的には認められないらしい。
幽香は肩を竦めると、溜めた魔力を霧散させる。

「私はどちらでも構わないわ。
もともとあちらから仕掛けてきた勝負だし。
……それで、先に進んでも良いのかしら。
貴方とも闘うのは面倒なんだけど」

「私だって面倒なのはお断りよ。
いいからさっさと行きなさい。
丁度良い感じに夜も更けてきたしね。
私は先に神社に帰ってるから」

しっしっと手で追い払う仕草をする霊夢。

「そう。何を企んでるかは、この際聞かないことにするわ。
――リグルにミスティア。貴方たちには、じっくりと聞きたいこと
があるの。
今度、『必ず』遊びに行くわね」

リグルとミスティアに般若のような笑みを向ける鬼。
その視線を浴びた二人は、抱き合って震え上がっている。

「それとチルノ」

「な、なによ。あたいは別に続けても構わないんだから！
あ、あたいはまだ負けてない！」

ファイティングポーズを取って、威嚇する。

「そういうの、私は嫌いじゃないわ。
今度は娘と遊んであげて頂戴。きっと喜ぶわ。
それじゃあね」

チルノに近づくと、頭をそっと撫でて、先に進んでいく幽香。
その余裕の態度に、チルノは思わず涙ぐんでしまう。

「く、悔しいけど、いつか必ず勝ってやるから！」

「そう、楽しみに待っているわ」

こちらを振り返ることなく、返事をする幽香。
マントで涙を拭い、震えているリグルとミスティア、笑顔のルーミアの元に向かう。

「……負けちゃったね」

「やっぱり強かった」

「ゴメン、あたいのせいで」

「チルノのせいじゃないよ。
まだまだ訓練が足りなかったんだよ」

「次頑張ればいいよ。ね」

ルーミアがチルノの肩を叩いて慰める。
いつの間に戻ってきたのかは、誰も突っ込まない。

「……いこっか」

「うん。今日は宴会だもんね」

「さ、元気だしていこう！」

ミスティアの明るい掛け声と共に、チルノ達は神社目掛けて飛び立つ。

（さぁ元気をだして博麗神社に向かおう。
悲しい顔のままじゃ皆に笑われちゃう
私達の伝説はこれからだ！）

――チルノ達はようやく登り始めたばかりだ。
この果てしなく遠い、最強への坂道を。

幻想郷四天王（命名チルノ）

・『氷』のチルノ
冷気を操る程度の能力

・『歌』のミスティア・ローレライ
歌で人を狂わす程度の能力

・『蟲』のリグル・ナイトバグ
蟲を操る程度の能力

・『闇』のルーミア
闇を操る程度の能力

・『鬼』の伊吹萃香
密と疎を操る程度の能力
密度を操る程度の能力

第十三話　幽香ＶＳ幻想郷四天王（後書き）

――チルノの勇気が幻想郷を救うと信じて。

第十四話　Ｒｉｓｉｎｇ　Ｓｕｎ　Ｆｌｏｗｅｒ

文々。新聞　号外
『幻想郷四天王、暁に散る！　風見幽香侵攻開始！』

速報だ。危篤状態と思われていた風見幽香氏だが、
地下に潜伏し、密かにクーデターを画策していた模様。
私兵を率い、幻想郷の要『博麗神社』へと侵攻を開始した。

いち早く情報を入手した記者は、侵攻ルート上に先回りすることにした。
そこには幻想郷の平和を守る、幻想郷四天王が既に防備を固めていたのだ。
四天王筆頭のチルノ氏に話を聞いた所、
「大ちゃんと遊ぶ約束をしているのよ。だから私達は必ず勝つわ！」
と、我々を励ます力強い言葉を残してくれた。

それがチルノ氏の最後の言葉となるとは、このときの私は考えもしなかった。

風見氏との交戦を前に、『鬼』と『闇』の２人が戦線を離脱。
既に崩壊しかけていた戦力を率い、
彼らは勇敢に戦ったが、奮戦空しく力尽きた。

噂によると最終防衛線において、残存戦力を結集中とのことである。
また、人型決戦巫女『博麗霊夢』も投入される予定だ。
記者も幻想郷の一員として、最後の時まで注視して事態を見守りたい。
果たして、幻想郷に光は差すのだろうか。

（射命丸　文）

・魔法の森上空

「……」

数多の障害を潜り抜け、ようやく目的地に辿り着いた。
チルノ達の所までは、なんとか我慢できたけれどもう限界だ。

即刻あの女のハウスを探し出して、ドブ鼠を炙り出してやる。
伝承に残るあの魔女狩のように。
燃え滾る業火に、罪深い白黒を放り込もう。
ついでに辺り一面、綺麗な火の海にしてやる。
面倒だから、今すぐ森ごと焼き払ってやろうか。
火の七日間だ。
クケケケケッ！

――いけないわ幽香。そんな短絡的に物事を考えてはいけない。
私の悪い癖よ。
それでは可愛い娘まで、巻き込んでしまうじゃない。
全然エレガントじゃないわ。もっと華麗で優雅にいきましょう。

そう、まずは取り戻してから。
その後に、思うが侭に焼き払うとしましょう。
綺麗さっぱり焼畑農法という訳だ。

今日も私は頭が冴えてるわね。自分で自分を褒めてあげたいわ。
さぁ、早速ダンスパーティの準備をしましょう。
まずは巨大なキャンプファイヤーが必要ね。
松明に着火して、と。

「おいおいおい、松明と怪しげな筒を山程持って、
お前は一体何をしようとしているんだ。
ここで花火でもやるのか？」

背後から、小憎らしい声が聞こえてきた。
クルッと、勢い良く首を回転させる。
箒に乗った白黒魔法使いを確認、ターゲットロックオン。

「泥棒猫の霧雨魔理沙、かしら？　ようやく見つけたわ。
私の可愛い可愛いあの娘を、どこに連れ去ったの？
今すぐに答えなさい。答えろ」

腕を幽鬼の様に魔理沙へ向け、ダラリと垂らす。
傘やら松明やら、爆薬がボロボロ落ちるが、もうどうでも良い。
キャンプファイヤーは血雨が振るので中止だ。これからは死の鬼ごっこよ。
どこまでもどこまでも追跡して、必ず取り戻す。
ギリギリギリと歯軋りする。呼吸が苦しい。
美咲分が足りない。一刻も早く摂取しなければならない。
３日間も引き離されるなんて、有得ない事態よ。

誰のせいだ。目の前にいるこいつだ。
フーっと大きく息を吐き出す。
瘴気のようなものが、辺りに撒き散らされる。

「こ、怖っ！　目が逝っちまってるぞ、おい。
それとその物騒な牙を隠せ。
落ち着いて冷静になって話し合おう。な？」

「――フフ、私は常に冷静よ。冷静なのよ。
魔理沙、殺しはしないけれど、半殺しよ。
泣いても喚いても絶対に許さない。
妖怪を、甘く見てはいけないということを、その身に刻み込んでやる。
クケケケケケケ！」

ケタケタと笑いがとまらない。ああもうすぐの辛抱よ。
腰を落として、飛び掛る態勢に入る。
勢い余って、喉元に喰いついてしまいそうだ。

「ほ、本当に怖っ！　誰が見ても泣き出すぞ。
こ、ここはひとまずスタコラサッサだぜ。
あばよとっつぁーん！」

箒を反転させ、物凄いスピードで飛び去って行く魔理沙。

「……フフッ、果たして逃げ切れるかしらね」

森に急降下して、落ちた日傘を拾う。
そのまま思い切り大地を蹴って、風を切り裂いて飛び立つ。
普段は動くのが好きではないだけで、別に鈍い訳ではないのだ。

只の魔法使い如きが、妖怪に挑もうなどと１０００年早い。
前方の黒い影を捉えたまま、全速力で追い続ける。
貴方の魔力が尽きた時が、人生のタイムリミットよ。

・博麗神社上空

神社に逃げ込むとは考えたわね。
と、言いたい所だけど、甘いわよ魔理沙。
目障りな博麗霊夢ともども粉砕してあげるわ。
今日の難易度はＬｕｎａｔｉｃなのよ。
絶対にコンティニューは認めない。
障害は、全員叩き潰してやる。

まぁ、一応勧告してみるとしよう。
面倒は少ないに越したことは無い。

博麗神社全体に聞こえるように大声を出す。

『霧雨魔理沙。後１０秒以内に出てこないと、神社ごと吹き飛ばす。
これは脅しじゃないのよ？』

境内に日傘を向けて、一発だけ強烈な砲撃を叩き込む。
凄まじい炸裂音と共に地面が削ぎ取られていく。
破片が賽銭箱に当たり、見るも無残な形に。
案の定中身は空だった。

「みすぼらしい神社が、更に哀れな様になってしまったわ。
実に愉快爽快ね」

口元に手を当てて笑みを漏らしてしまう。
しばらくすると、箒に乗った白黒魔女が飛び上がってきた。

「いきなり何てことするんだ。後で霊夢の奴が怒り狂うぞ。
あんなに馬鹿デカい穴あけちまいやがって」

警戒しながら一定の距離を取って、私に相対する魔理沙。
――私の宝物を抱えるように乗せて。

「貴方こそ娘を乗せて、一体どういうつもりなの。
今すぐにその娘を放しなさい！
そ、それにその格好は――」

魔理沙はどうでも良いのだ。
問題は一緒に箒に乗っている美咲だ。
く、黒い魔女服に、とんがり帽子。
ななななんということを。最も恐れていた事態がッ！！
私の悪夢が、げ、現実に……。

思わず眩暈がして飛行状態を解いてしまう。

あっ―。

「お、おい大丈夫か！？」

魔理沙の声で、間一髪持ち直して、何事もなかったかのように元の場所に戻る。

危ない危ない。闘わずして墜落するところだったわ。

「え、ええ大丈夫よ。何の問題もないわ

そ、それよりも美咲。貴方のその格好は……」

「魔理沙さんから頂いたんです。

この服、似合ってますか？」

似合っている、似合っているがッ！

写真も撮らなければいけないぐらい、似合っている！

だがしかし、その状況は頂けない。実に頂けないわ。

だ、だからあれだけ近づいてはいけないと口を酸っぱくして言ったのに。

「ぐ、ぐぬぬ」

「おーい」

「どうしたんでしょうか」

「遠い世界に入っちゃったみたいだぜ」

魔理沙達がヒソヒソ喋っているようだが、私の耳にはまるで入らな

い。

このままではまずい。
非常にまずい。

いずれ語尾に『だぜ』をつけて話し出すに違いないのだ。
そしてカントリー〇ードを歌いながら、私の元から旅立っていく結末。
もう帰れない日々。さようなら夏の日。

い、嫌よ。まだ間に合う。間に合うはずだ。
そんな未来は美咲には必要ないのよ。
おしとやかで、健やかに育ってくれれば私はそれで良い。
だから魔女になったり、弾幕の練習をする必要はまるでない。
そう。闘いを覚える必要など、ない。

私は努めて真剣な表情で二人を見据える。

「美咲、今すぐに一緒に帰るわよ。
良い子だから、こっちにいらっしゃい。
怒ったりしないから」

「あの時、美咲の言った事をもう忘れたのか？
ウチでしっかり勉強してるんだから、見守ってやれよ。
それが親ってもんだぜ」

口を挟んでくる白黒泥棒猫。
私は殺気を放って威嚇する。

「魔理沙、お前は黙っていなさい。
後で、嫌と言う程じっくりと料理してやるわ」

「申し訳ありません母様。その言う事は聞けません。
私には私の考えがありますから」

ああ、どうすれば分かってくれるのかしら。
こうなれば、殺してでも奪い取るか。うん、そうしよう。
実に分かりやすいしシンプルだ。

牙を剥き出しにして、妖気を急速に充填させようとしたところ、
魔理沙が慌てたように提案してくる。

「そういうときは、幻想郷ではこうするのが決まりだろう？」

スペルカードを取り出し、美咲に手渡す魔理沙。

「弾幕ごっこで決めるというの？
ふざけたことを」

「ふざけてなんかいないぜ。
私達とお前だけの真剣勝負だ。簡単だろう」

「わ、『私達』？　ま、まままままさか」

それは異議ありだ。魔理沙だけにしよう。そうしよう。

「そのまさかだぜ。
今回はハンデ戦だ。私が回避を担当して、攻撃は美咲だ。
経験がお前とでは段違いだから、多少のサポートもするがな」

「で、でもそれは」
私が娘に手を上げるということではないか。
そんなことできないわ。絶対に。
「母様。私はまだ未熟ですけれど、全力でいきます。
手加減は必要ありません」
スペルカードを掲げ、私に向かって声を上げる娘。
き、聞こえないわ。我が娘が何を言っているか全然分からない。
そこへ颯爽と登場するインチキ婆。
「フフッ、合意とみてよろしいかしら？
ジャッジは私がしてあげるわよ。
本当、面白いことになったわねぇ幽香」
「すっこんでろ隙間ババァ！！」
「あらあら、八つ当たりはみっともないわよ。
大妖怪ともあろうものが情けない」
式神まで引き連れて、実に楽しそうに微笑んでいる。
人の不幸は蜜の味とでも言いたげな面しているわ。
本当に忌々しい奴だ。
「ご、合意なんてしていないわ。誰がそんなこと」
ダメ、絶対。

「良い大人がグダグダと五月蝿いわねぇ。
じゃあ用意はいいかしら？　始めるわよ」

「ま、待ちなさいッ！！」

数字の映った謎の隙間を展開し、カウントを勝手に開始する紫。
その後ろには、実に嬉しそうな顔でシャッターを押し捲る天狗の射命丸。
フラッシュが、眩しい。

ば、馬鹿な。どうしてこうなったの。

魔理沙＆ａｍｐ；美咲の魔女コンビは戦闘体制を既に整えている。
や、やるしかないというの。
どうする。どうするの私。

射命丸文
風を操る程度の能力

第十五話　とある妖魔の破壊光線（マスタースパーク）

月明かりが辺りを照らす中、色彩鮮やかな弾幕が咲き乱れる。
なし崩し的に始まってしまった弾幕勝負。
魔女コンビは即席とは思えない動きで、軽やかに弾幕を描いていく。
ふと地上を見れば、野次馬根性丸出しの馬鹿共が騒いでいる。
妖怪やら宇宙人やらの百鬼夜行が、いつの間にか境内に集まっていたのだ。

神社の主である貧乏巫女はといえば、口をへの字に曲げて、神社の惨状を虚ろな瞳で見つめていた。

「おい、なんで反撃してこない。やる気ないのかお前！
余所見なんかしやがって！」

痺れを切らした魔理沙が私に声をかけて来た。

「母様、何故撃ち返してこないんです。私は本気で戦っているのに」

苛つきを隠せないといった様子で、私に問いかける娘。
このような表情をみるのは初めてなので、少しだけ動揺してしまう。

「……」

「母様？」

確かに、この弾幕勝負が始まってから私は一発も撃ち返していない。
ただの一発もだ。
ここまでの間、全て回避に注力していた。

魔理沙の指摘する『やる気』というのが、戦う気持ちであるならば
それは正解だ。
私は娘と戦う気持ちなど一切持っていない。
わざと被弾して、負けても良いかとも思っていた。
別にこの勝負が何かを変えると言うわけでもないのだから。
私にとっては弾幕ごっこなど、その程度の遊びにすぎない。

ただ、それだけでは無いというのも事実だ。
私は思わず見とれていたのだ。
娘の作り出す弾幕の色彩に。

美咲の放つ弾幕は密度が薄く、当てずっぽうに撃ちまくるだけで、
少しもプレッシャーを掛ける事が出来ていない。
わざとカスらせる余裕が幾らでもある。
またこの3日間で作り上げたと思われる幾つかのスペル。
独創性は認めるが、まるで構成が練られていない。
気味の悪い、一つ目青リンゴが単純に追尾してくるだけの攻撃だ。
移動速度は魔理沙が担当してるだけあり相当なものだが、どうみて
も美咲が足を引っ張っている。

残念ながら、私を相手に戦うには力不足が過ぎる。
基礎を学んでから3日程度のヒヨッ子が、いくら頑張ろうと無理な
ものは無理だ。
勝負になる訳がない。

だがしかし、さっきから、弾幕が酷く掠れて見えるのだ。
弾幕の光が滲んで見える。
この視界を奪う攻撃は、魔法によるものなのだろうか。
それにこの目から流れ落ちる熱い液体。
どうしても止めることができない。
ああ、一体何故なのかしら。

「す、凄い。ら、藍様。あの人泣きながら戦ってます！」

「私にはとても良く気持ちが分かるよ。あれが『親心』というものだよ、橙。
思わず胸が締め付けられるな」

「私も良くわかるわぁ。藍ったら最近は全然構ってくれないものね。
とっても寂しいわ」

「まぁ、それは置いといて」

「これだもの。昔は素直で可愛い子狐だったのにね
どうしてこうなったのかしら」

「紫様は昔から世話焼きのお節介婆でしたね。
今でも変わりませんが」

「……後で御仕置きよ、藍」

くだらない戯言を隙間達が喋っているが、私の頭には入っていかない。

な、なんという立派な姿なのだろう。
たった3日見ない間に、これだけの攻撃を放つことが出来るなんて。
感極まって、溢れる涙を抑えることが出来ない。
愛する子供が、偉大なる親に立ち向かう泣けるシチュエーション。
こ、こういうのもあるのね。今まで考えたこともなかったわ。
竜騎将やパ〇スの気持ちが、今ようやく理解できたわ。
いや〇パスは息子と戦っていないじゃない。落ち着くのよ幽香。

「おい、この親馬鹿妖怪！　泣いてないで撃ちかえして来い！
手加減されて勝った所で、嬉しくもなんともないだろ！」

高速移動する箒を制御しながら、通常弾を更にばら撒いてくる。
わざと当たっても良いかと一瞬思ったが、すんでのところでグレイズ。

「うう。貴方の様な小娘には、私の気持ちは理解できないわよ！」

左手から火吹食人花を召還する。
土管から這い出る、配管工殺しに定評のあるアイツだ。
掌サイズの、自然に優しい省エネタイプだが。

挨拶代わりに火炎弾の嵐をお見舞いする。
小型だが威力はお墨付きだ。

「おおっと。ようやくやる気になったか。
美咲、アイツの隙を狙って大技をぶちかませ！」

ジグザグに箒を巧みに操り、火炎弾を回避する魔理沙。
流石にこの程度では落とせないか。

それに、何やら切り札をもっているらしい。
ならば堂々と受け止めてやろう。
それが親というものだ。
火吹花をポイッと放り投げる。さらばエコ仕様。

「……分かったわ」

「うん？」

私の小声に、魔理沙が怪訝そうに反応する。

最早戦闘を回避する必要もない。
命のやりとりではない、誰にでも勝つ可能性がある。
それが弾幕ごっこだ。

要は私の気持ちの問題だったというだけの話だ。
だって、今まで手を上げたことが無いんだから仕方がない。
それ程までに可愛くて、とても良い子なのだから。

「これ以上、小手先の技を幾ら使っても、私には絶対に届かないわ。
だから美咲、今貴方が持っている最高のスペルを使いなさい。
わ、私も全力で受け止めてあげるから。……う、ううっ」

嗚咽を堪え涙を拭い、真剣に娘を見詰める。
泣いてはダメよ。私は大人なんだから。

こうなれば、わざと被弾して勝ちを譲るのは止めだ。
もうそのつもりはない。

とてつもなく高い、ぶ厚い壁となって娘の前に立ちはだかろう。
『地獄の壁』となりて、長きにわたり打倒されるべき最強の敵となろう。
それもひとつの愛ではないだろうか。
そしていつか私を乗り越えていくのだ。
実に素晴らしい。
打ち倒されたそのとき、私は晴れやかな笑顔を浮かべているはずだ。

……いけないわ、またいつもの妄想が。
そもそも『地獄の壁』ってなによ。
打倒されるべき敵って。私は魔王か何かなのか。

「魔理沙さん、切り札を使います。母様を打ち倒すには、もうこれしかありません」

「よーし、魔力をチャージしろ。この八卦炉に全ての力を回すんだ！照準は私がつける。お前はタイミングを計って全力でぶっ放せ！！」

「分かりました」

「ふん、即席コンビなど魔力を溜めるまでも無いわ。
抜き打ちで相手をしてあげましょう。今回は特別よ？」

「そんな余裕こいてて良いのか？
醜態晒しても知らないぜ！」

「やれるものならやってみなさい」
本来なら溜めの際の隙など見逃す訳は無いが、それを邪魔するのは無粋というもの。
力を抜き、ゆったりと日傘を構える。
そしてミニ八卦炉を構える魔理沙と美咲を焼き付けるように見る。
まるで演劇の1シーンの様ではないか。
なんという凛々しい姿なのだろうか。後で天狗から写真を全て頂くとしよう。

「チャージ完了です。いきます！」

「来なさい。全てを受け止めてあげる」

「今だ、ぶっ放せ！！」

「魔砲『マスタースパーク』！！」

おびただしい魔力を帯びて、轟音と共に大出力の砲撃が私目掛けて放たれる。
成程、流石は私の娘だけはある。
照準や魔力のコントロールを魔理沙に任せてるとはいえ、
中々の威力を持っていそうだ。
当たれば、それなりのダメージを受けるだろう。
しかし、それでは私には及ばない。

「それは元々私の魔法なのよ。美咲、貴方には言っていなかったかしらね」

一瞬手加減してしまいそうになるが、それはしてはならないことだ。
手加減して、勝ちを譲られて一体何になる。
魔力を一気に解き放ち、砲撃態勢に入る。

「これが本家のマスタースパークよ。受け取りなさい！」
日傘から、抜き打ちで極白色破壊光線を放つ。
後一歩で私に直撃するはずだった、光線を飲み込み押し返す。
魔理沙と美咲の元へと、逆流する極大の魔力光が殺到する。

「――あ、ああ」

「美咲、力を振り絞れ！　まだまだこれからだ！」

「は、はい」

魔理沙の掛け声と共に、力を振り絞る娘。
恐らく魔理沙が手助けしているのだろう。
でなければ押し留めることなど出来はしない。
ギリギリの所で、破壊光線の直撃を防いでいる。

「中々粘るわね。そういうのを火事場の馬鹿力というのかしら」

「ド根性って言うんだよ！」

「あらそう。じゃあもう一人作り出しちゃおうかしら」

能力を使い、分身を作り出す。
当然ながらトリックなどではなく実体だ。
世間ではドッペルゲンガーとでも言うのだろうか。
最近は余り使ったことが無い。よって私が使えるという事を知るものも少ない。

切り札は先に見せてはいけない。見せるなら更に切り札を持て。
そうどこかの妖怪も言っていた。

「ぶ、分身！？」
「な、なんてインチキな！」

「ごめんなさいね？　人生って意外に厳しいのよ」

分身に魔力を籠めさせ、マスタースパークを発動させる。
拮抗を保っていた光線のぶつかり合いに、勢い良く加勢させる。
爆音を放ち、懸命に戦っていた魔女達を眩い光が飲み込んでいく。

――これで、終わりね。

――――――――――――――――――――――――

地面に倒れ伏している、煤やら埃まみれの美咲と魔理沙の下に降り立つ。

殺傷目的ではないから当然生きている。
が、初めて娘に対し手を上げてしまったという事実が
私の胸を締め付ける。
本当にこれで良かったのだろうか。

「なーにしんみりした顔してんのよ。たかが弾幕勝負じゃないの。
勝ったり負けたり、勝負は時の運と少しの実力よ」
博麗霊夢がひょいと隣に降り立つ。
慰めにでも来たのだろうか。似合わないことを。

「貴方に、私の気持ちは分からないわよ」

「別に分かりたくないけど。
とりあえずこいつら神社に運ぶから手伝いなさい。
ウチを壊した件については、後でゆっくり聞かせてもらうから」

アンタは娘を背負いなさいと言い、魔理沙をよいしょと背負う霊夢。
私はその言葉通り、美咲を抱きかかえる。
顔中泥と汗まみれ、魔女服もボロボロだ。
こんなに小さい体で、とても頑張った。
本当に良く頑張ったと思う。

「ほらほら、他の連中も早く酒飲ませろって騒いでるから早く行くわよ。
いつのまにかゾロゾロ集まってきちゃって。まったく」

「そんな事だから、普通の人間が寄り付かないのよ」

「うるさいわね。放っておいて頂戴」

プイッと横を向いて、空中に浮かび上がる巫女。

さぁ私達も行くとしよう。

相も変わらず騒がしい、馬鹿者達の所へ。

特別ゲスト

・ガッププリン

1つ目の気持ち悪い青リンゴ。

仲間に加えることができる。

・パックンフラワー

魔法によって意思を持った凶暴な人喰い植物。

火を吐いたり、棘弾を放ったりする。

・地獄の壁
ＵＳＮ陸軍戦車師団特機中隊前線都市防衛部隊特殊小隊第６４機動戦隊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2122v/

親馬鹿花妖怪

2011年11月23日18時47分発行